福岡市埋蔵文化財調査報告書第484集

NISI JIN MACHI

西新町遺跡 5

1996

福岡市教育委員会

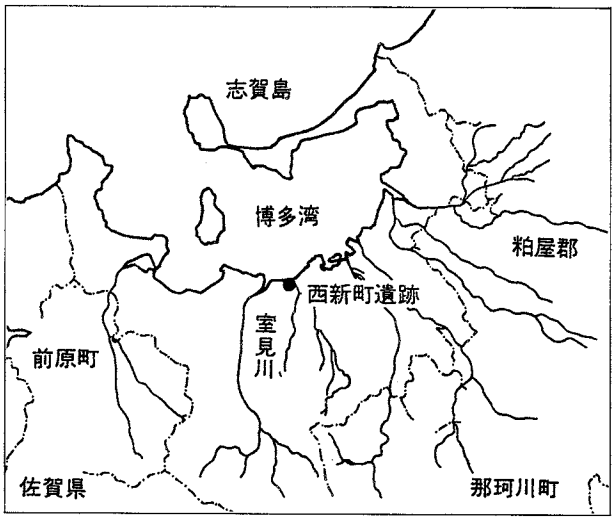
西新町遺跡５（第484集）正誤表

頁	行	誤	正
1	6	西隣地	東隣地
2	27	末製品	未製品
3	Fig.1		緯線　X＝+64,500 経線　Y＝-59,500 (1/4,000)
5	Ph.1	(北東から)	(北西から)
	Ph.2	(北東から)	(北西から)
6	Fig.4	４層 26層 27層 28層	６層 4a層（SX39覆土） 4b層 ５層 ６～21層（SC44覆土）
7	Ph.5	(南から)	(北から)
	18	主柱穴とも	主柱穴と
13	17	は反応しない	の反応はH（○）である
14	Ph.9	(南から)	(西から)
15	Ph.11.12		左右入替え
21	20	SX39	SX40
23	Tab.2	81.備考内容	80.備考内容

福岡市

NISI JIN MACHI

西新町遺跡5



調査番号　9440
遺跡略号　NSJ-8

1996

福岡市教育委員会

SX39 土器出土状況（北から）

鉄塊系遺物 43 上面

同下面

ガラス容器 46

序

本市早良区の西新・藤崎地区は弥生時代の初めから連綿と集落が営まれ、海に開かれた拠点的な集落として多くの文物を招来した先進的な地域でありました。

都市高速鉄道の開通以来、西の交通・生活の拠点として再開発が活発であり、現在西新地区の事前の緊急調査は10次を数えるに至っております。

本市でもこれら失われてゆく遺跡の保存に努めているところであり、本書も記録保存として、民間の自社ビル建設にともなって行なわれた緊急発掘調査の報告書であります。

調査の結果、西新・藤崎地区ではじめて弥生時代中期の住居址が検出され、また同時期の、最古期に属する製鉄関係遺物・ガラス容器を検出し、まさに先進的な様相を示す内容でありました。

本書が埋蔵文化財に対する理解の一助となるとともに、学術研究においても活用していただければ幸いであります。

調査に際しましては地権者の皆様はじめ多くの方々のご理解とご協力を賜わりました。心より感謝の意を表する次第であります。

平成8年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 尾花　剛

例　言

1．本書は早良区西新に所在する、西新町遺跡第８次発掘調査の調査報告書である。

2．調査区内のグリッド割りは調査対象地の長辺に沿って３ｍ間隔で設置し、グリッドの呼称は北西交点とした。

3．本書で用いる方位は座標北である。

4．遺構の呼称は記号化し、竪穴住居址―SC・土壙―SK・溝―SDとした。

5．本書に使用した遺構実測図は加藤良彦・吉岡員代・末松克子による。

6．本書に使用した遺物実測図は加藤・大塚紀宜・平川敬治による。

7．本書に使用した写真は加藤・平川による。

8．本書に使用した図面の整図は加藤・山崎賀代子・伊藤美紀による。

9．本書の執筆・編集は加藤が行った。

10．本書にかかわる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに……1
　1．調査に至る経過……1
　2．調査の組織……1

Ⅱ．調査区の立地と環境……2

Ⅲ．調査の記録……6
　1．調査の概要……6
　2．弥生時代の調査……7
　　1）弥生時代中期の遺構……7
　　2）弥生時代終末期の遺構……13
　　3）弥生時代中期末～後期初頭の遺構……17
　3．古墳時代の調査……18
　4．その他の遺構……19
　5．その他の遺物……20

Ⅳ．小結……21

挿　図　目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図 …… 3
Fig. 2　調査区周辺地形図（1／500） …… 3
Fig. 3　遺構全体図（1／120） …… 4
Fig. 4　調査区南壁土層断面図（1／40） …… 6
Fig. 5　SC45実測図（1／60） …… 8
Fig. 6　SC45出土遺物実測図（1／4） …… 8
Fig. 7　SX39実測図（1／40） …… 9
Fig. 8　SX39出土遺物実測図（1／6） …… 10
Fig. 9　SX40実測図（1／50） …… 11
Fig. 10　SX40出土遺物実測図（1／4） …… 12
Fig. 11　出土鉄塊系遺物実測図（1／3） …… 13
Fig. 12　出土ガラス片実測図（1／2） …… 13
Fig. 13　SC01実測図（1／60） …… 13
Fig. 14　SC01出土遺物実測図（1／4） …… 14
Fig. 15　SC44実測図（1／60） …… 15
Fig. 16　SC44出土遺物実測図（1／4） …… 16
Fig. 17　SC46出土遺物実測図（1／4） …… 17
Fig. 18　SC46実測図（1／60） …… 17
Fig. 19　SK09実測図（1／40） …… 18
Fig. 20　SK09出土遺物実測図（1／4） …… 18
Fig. 21　SD12出土瓦（1／2） …… 19
Fig. 22　SX43実測図（1／20） …… 19
Fig. 23　その他の遺　物（1／4、1／3） …… 20

写　真　目　次

Ph. 1　上面全景（北東から） …… 5
Ph. 2　下面全景（北東から） …… 5
Ph. 3　SC45検出状況（南から） …… 7
Ph. 4　SC45完堀状況（南から） …… 7
Ph. 5　SC45土層断面（南から） …… 7
Ph. 6　SX39(北から） …… 9
Ph. 7　SX39横断面（北西から） …… 9
Ph. 8　鉄塊系遺物 …… 11
Ph. 9　SC01検出状況（南から） …… 14
Ph. 10　SC01完掘状況（西から） …… 14
Ph. 11　SC44検出状況（東から） …… 15
Ph. 12　SC44完掘状況（北東から） …… 15
Ph. 13　SC46検出状況（西から） …… 18
Ph. 14　SC46完掘状況（南東から） …… 18
Ph. 15　SK09検出状況（南から） …… 19
Ph. 16　SD05土層断面（西から） …… 19
Ph. 17　SX43（南から） …… 19

表　目　次

Tab. 1　出土遺物一覧表(1) …… 22
Tab. 2　出土遺物一覧表(2) …… 23
Tab. 3　遺構一覧表 …… 24

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

今回の調査は株式会社原田組が市内早良区西新５丁目644—1・644—2番地内において自社ビルの改築を計画し、事前の埋蔵文化財の有無の確認のため事前審査願が平成６年７月18日に福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出されたことにより始まる。受付番号は6—2—147である。

埋蔵文化財課では計画地が西新町遺跡内である事、西隣地で発掘調査を実施している事から、試掘調査を行う必要があると判断、平成６年７月26日試掘を実施した。

試掘は申請地の中央にトレンチを一本設定、地表下110～130cmで弥生～古墳時代の厚さ50cm程の遺物包含層を確認した。周辺調査の状況から弥生～古墳時代の集落・墓地の存在が予見された。

このため本課と申請者で協議の結果、申請地北側の既存の鉄骨造４階建ビル部分は遺構が遺存しないと判断し、南側の空地部分の700㎡を対象として本課が記録保存のため緊急発掘調査を行う事となった。調査は平成６年９月６日～同年11月18日まで実施した。

調査番号	9440	遺跡略号	NSJ—8
調査地地籍	早良区西新５丁目644—1・644—2	分布地図番号	72（荒江）A—1
開発面積	1434.78㎡	調査実施面積	610㎡
調査期間	940906～941118	事前審査番号	6—2—147

2．調査の組織

調査委託：株式会社　原田組
調査主体：福岡市教育委員会　教育長　尾花剛
調査総括：埋蔵文化財課長　折尾学（当時）　埋蔵文化財課第１係長　横山邦継
調査庶務：埋蔵文化財課第１係　吉田真由美
調査担当：埋蔵文化財課第１係　加藤良彦
調査協力：有吉貞江　上原チヨ子　太田孝房　末松克子　杉村文子　津田和子　平田信吉
松本愛子　吉岡アヤ子　吉岡員代　吉岡竹子　吉積ミエ子　末石修　林チセ子　林末孝
板谷元顕　三島啓介　平野義光　尾崎瑞穂　谷崎峰子　坂本隆二　松園重子
末松ミサ子　青柳美子
資料整理：平川敬治（九州大学）　木村厚子　能美須賀子　国武真理子　窪田慧　山崎賀代子
山田順子　富永優子　伊藤美紀

Ⅱ．調査区の立地と環境

西新町遺跡は福岡市の都心部より西へ４㎞、百地浜埋立前の旧海岸線から南へ600ｍの地点、県立修猷館高校のグランド南側を中心に、東西800ｍ、南北300ｍの範囲に広がっている。

早良平野の東北端の湾岸に位置し、標高３～５ｍの砂丘稜線上と南側後背斜面に立地している。博多湾南岸には東区箱崎から博多区呉服町・中央区天神・早良区西新・藤崎・西区姪浜へと分布する海浜砂および風成砂からなる古砂丘・新砂丘が発達しており、本遺跡も縄文晩期以降に形成されたこの砂丘上に立地している。この砂丘の背後には皿山（標高29m）・麁原山（標高32m）等の第３紀の独立丘陵がせまり、これらの南側には後背低地が広がっている。

西新町遺跡では現在までに10次にわたる調査が行われており、修猷館高校グランド南側の稜線上で弥生時代前期末～終末期の、中期中頃～後半を中心とした甕棺墓群（1・2・5・10次調査）を検出しており、２次調査区では甕棺内部からゴホウラ製貝輪・細形銅剣切先・ガラス製小玉が検出されている。10次調査では中期後半の成人甕棺内から頭蓋骨を欠く人骨と、直上の小形棺から頭蓋骨のみが出土しており、戦闘か儀礼かと議論をまきおこしている。藤崎遺跡を含め現在までに300基程の甕棺が検出されているが集落は未発見であった。今回、本調査区と西隣の９次調査区で始めて集落の広がりを確認している。最盛期は弥生時代終末期から古墳時代初頭の「西新式土器」の時期で、全調査区で多数の竪穴住居址が検出されており、飯蛸壺・石錘等の漁撈具が目立っている。また板状鉄斧や朝鮮半島系土器・山陰系・畿内系等内外の多数の外来土器が検出されており、海洋交易の拠点集落としての様相がうかがえる。

周辺の砂丘上では、西新町遺跡の西側500m 程の同じ砂丘上に藤崎遺跡が立地する。同様に砂丘稜線部を中心に弥生前期初頭～古墳時代前期にかけての甕棺墓・土壙墓・石棺墓・方形周溝墓等の墳墓を中心に検出しており、三角縁二神龍虎鏡・三角縁二神二車馬鏡・方格渦文鏡・珠文鏡・変形文鏡・素環頭大刀を供伴している。古墳時代後期には竪穴住居址が散漫に展開し、土錘等漁撈具が多く検出される。古代から中世にかけては西新よりまとまっており、井戸・溝・土壙等が検出され、特に13世紀代の方形に区画し内側に柵列を設ける溝は元寇との関連が示唆される。

藤崎遺跡から、室見川をはさんで西側につらなる砂丘上に姪ノ浜遺跡群があり、弥生時代中期から後期にわたる40数基の甕棺墓と古墳前期までの住居址が検出されている。殊に古砂丘上の３次調査区では旧石器時代の尖頭状石器、弥生中期の擦り切り技法を用いた末製石器・多量の石錘・製塩土器等の生業関係資料と漢式三角鏃・半島系無文土器・南海産の貝輪未製品・貝玉等の外来資料が注目される。

姪浜の砂丘南側には藤崎遺跡同様、第３紀の独立丘陵があり、古墳時代前期の五島山古墳群が立地する。1914年（大正３年）に丘陵最頂部の円墳から箱式石棺が見つかり、２面の二神二獣鏡をはじめ銅鏃・鉄剣・玉類の副葬品が出土している。

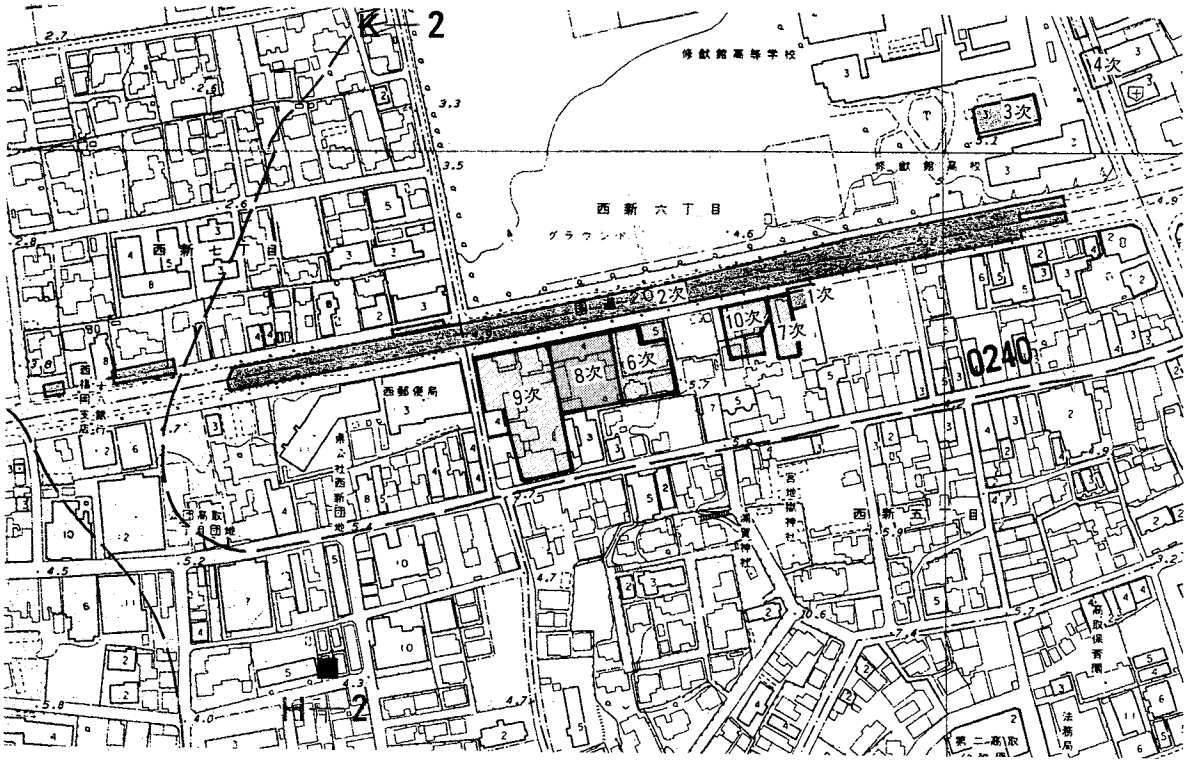


Fig. 1　周辺遺跡分布図

Fig. 2　調査区周辺地形図（1／500）

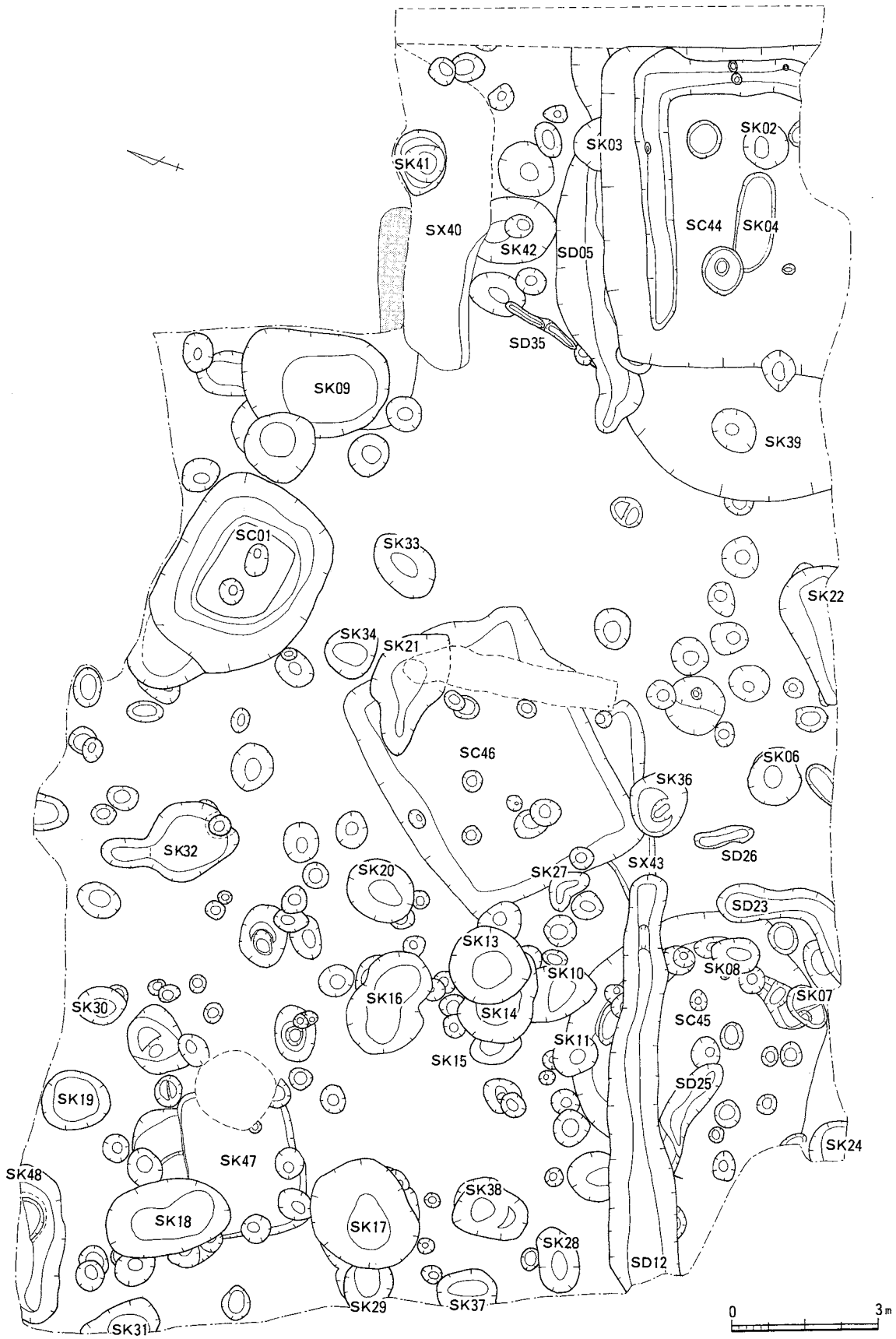


Fig. 3　遺構全体図（1／120）

Ph. 1　上面全景（北東から）

Ph. 2　下面全景（北東から）

Ⅲ. 調 査 の 記 録

1．調査の概要

調査区は砂丘稜線から南に下がった後背緩斜面に位置し、地表の標高は約5.8m である。土層断面（Fig. 4）は表土下１ｍまでが近・現代の造成土（表土)、1.3m までが暗褐色砂質土で伊万里系陶磁から高取焼の焼損品・窯道具を包含する近世・近代の堆積層（1 層)、1.5m までが黄白砂細砂の水成層（2 層）で遺物を含まない。高取焼関係の遺物はこの上面からの掘り込みから検出される。1.8m までが暗灰褐色砂質土（3 層)、2 ｍまでが暗褐～黒褐色砂質土（4 層)、2.2m までが暗灰褐色砂質土（5 層）で地山の黄白砂を斑状に含む。以下が黄白色中砂～粗砂の基盤層である海浜砂となる。遺物包含層は 3・4 層が古墳～弥生時代遺物を、5 層が弥生時代遺物を主に検出する。

調査は 3・4 層を除去した 5 層上面の段階で、4 層土を覆土とした遺構と土器溜りが検出されたため、これを検出面として調査を行ったが不鮮明な部分が多く、東端部にトレンチを掘削した結果、黄白砂上でも遺構が検出されたためこれを下面として、上下二面にわたって調査を実施した。

結果、検出した遺構は上面で古代の溝 2 条（SD05・12)、土壙 1 基（SK03)、古墳時代初頭の土壙 2 基、弥生時代終末期の竪穴住居址 1 軒（SC01)、土壙16基（SK02・04・06・08・10・11・13・14・15・16・17・19・20・21・22・27)、中期末～後期初頭の溝 1 条（SD23)、弥生中期後半～末の土壙 9 基（SK24・28・29・30・31・32・36・37・38)、溝 3 条（SD25・26・35)、土器溜り 2 基（SX39・40）を検出、下面で弥生終末期の竪穴住居址 2 軒（SC44・46)、土壙 2 基（SK47・48)、弥生中期後半～末の竪穴住居址 1 軒（SC45)、土壙 1 基の計48基の遺構と柱穴を多数検出した。しかし、上面で弥生中期の遺構を、下面で弥生終末期が検出され、SX39 と SC44 の切合いが逆転する等、上面で見逃がした遺構が多く、土層断面観察でも弥生中期・終末期ともに上面検出面から20cm上方からの掘削であり、遺構面での時期差は認められない。よって遺構全体図 Fig. 3 は上・下面を合成している。

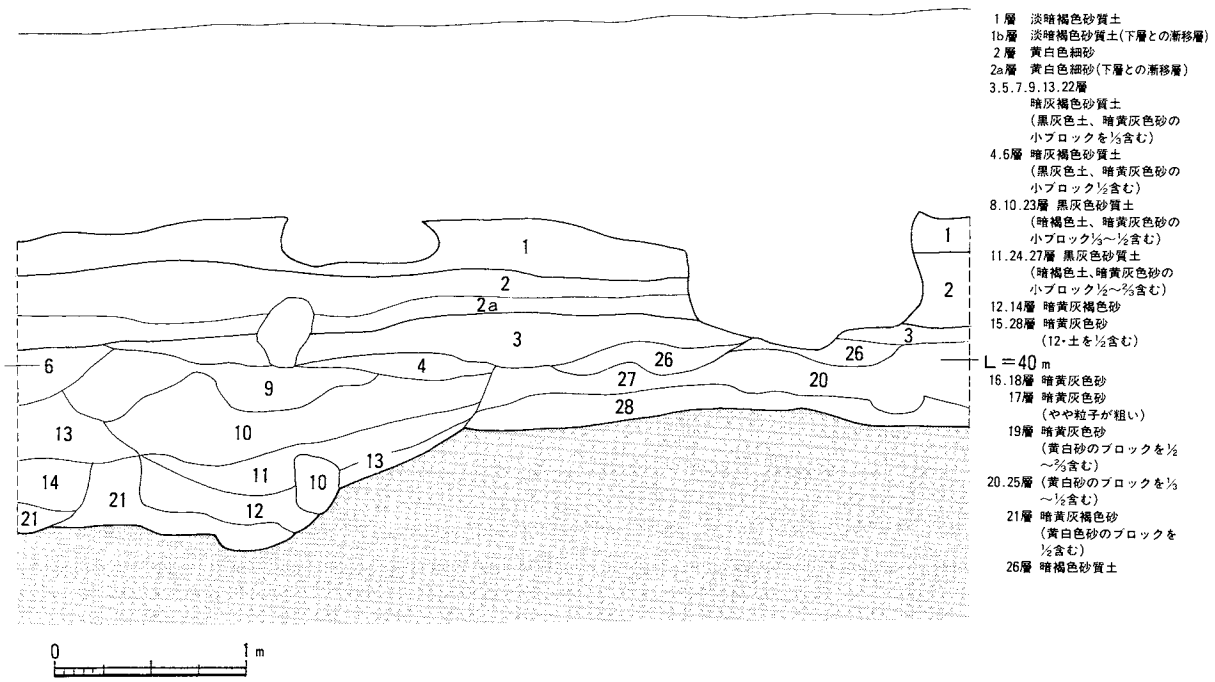
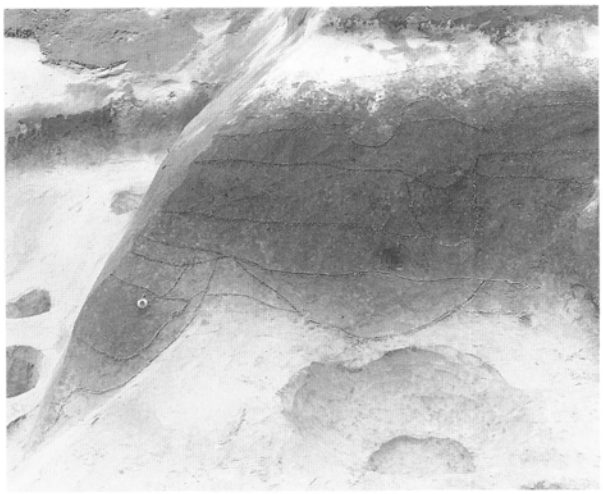


Fig. 4　調査区南壁土層断面図（1／40）

Ph. 3　SC45検出状況（南から）

Ph. 4　SC45完堀状況（南から）



Ph. 5　SC45土層断面（南から）

2．弥生時代の調査

該期の遺構は弥生中期後半～末の住居址１軒・土壙10基・溝状遺構３条・土器溜り２基、中期末～後期初頭の溝状遺構１条、終末期の住居址３軒・土壙18基の計38基で８割方を占めており本調査区の中心をなす時期である。

弥生中期は調査区の西半部に生活遺構が、東半部に土器溜りと土壙１基で西半部に集中しており、これは西隣りの９次調査区に広がっている。

終末期は住居址の可能性が有るSK48・47・23を含めて、15m程のベルト状に北西から南東に遺構が集中している。

1）弥生時代中期の遺構

SC45（Fig. 5）　SC45は調査区の南西端に位置する。東西5.6m南北5.3mの円形住居であり、西新・藤崎遺跡で初の甕棺墓に対応する生活遺構の検出であった。東・西・北に幅40cm程の壁溝を巡らせている。深さは検出時で50cm程、土層観察では80cmを測る。主柱穴は壁溝の中に有り、1.5m程の間隔で６本が円形に組まれている。深さは50cm程である。中央に径60cm程の柱穴があるが、土層断面では床上15cm程の上面から掘り込まれている。主柱穴も三ヶ所で切り合っており、建替え時に新たに加えられたものと思われる。横断面では両側の主柱穴とも幅・深さともそろっており、焼土・炭粒も確認されず、炉とは考え難い。

出土遺物は少量で、上面の床上を中心に中期後半～末の弥生土器片と７点の叩石、１点の砥石を検出している。

出土遺物（Fig. 6）　1～3は甕で、1鋤形口縁をもち、口径33.2cmを測る。2は「く」字口縁の甕で口径23.5cm。出土遺物中最も新しい様相を示すものである。3は甕の底部で径10.6cmで薄く広い底をもつが体部はゆるく外反している。4は「く」口縁の鉢で口径22cmを測る。5は鋤形口縁の壺で内外に丹塗磨研を施し、口縁上面に暗文を施す。6は鋤形が退化した広口壺で、全面丹塗磨研で口縁上面に暗文を施す。7は直口口縁の鉢で口径18cmを測る。内外ともヨコナデ調整。8は器台で口径9.4cm。外面はタテハケ後ヨコナデを施す。

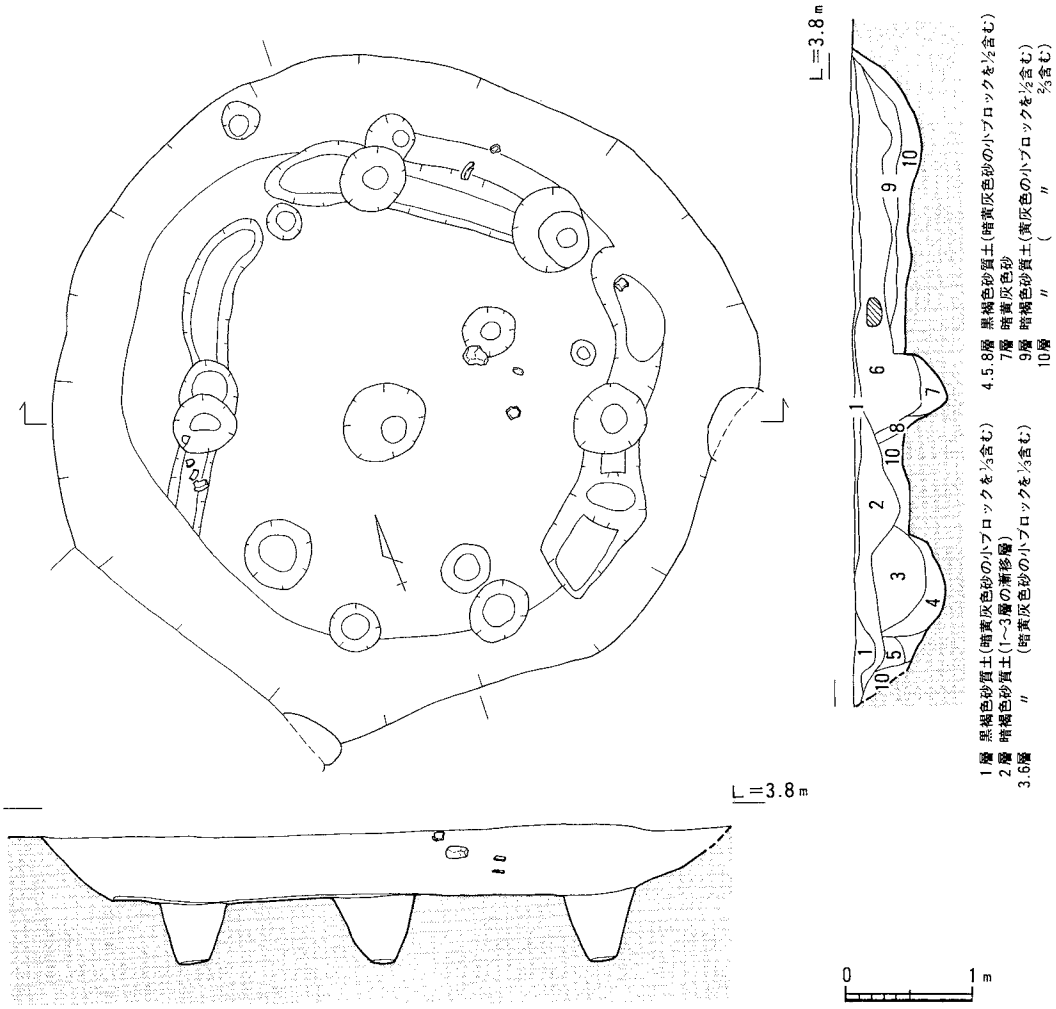


Fig. 5 SC45実測図（1／60）

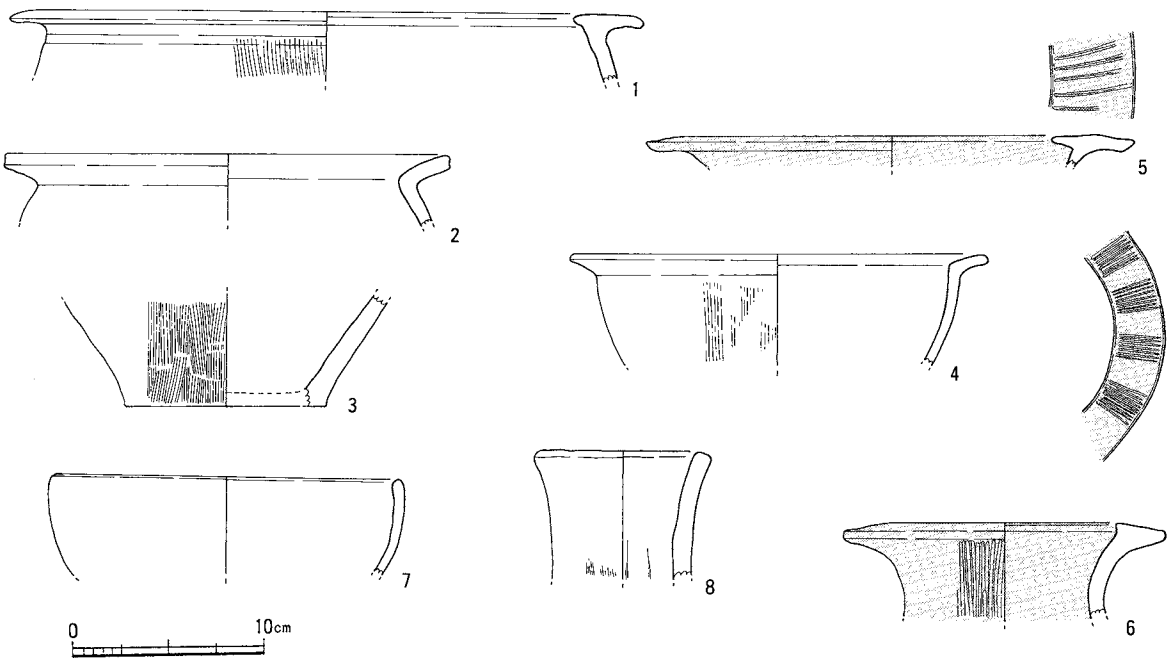
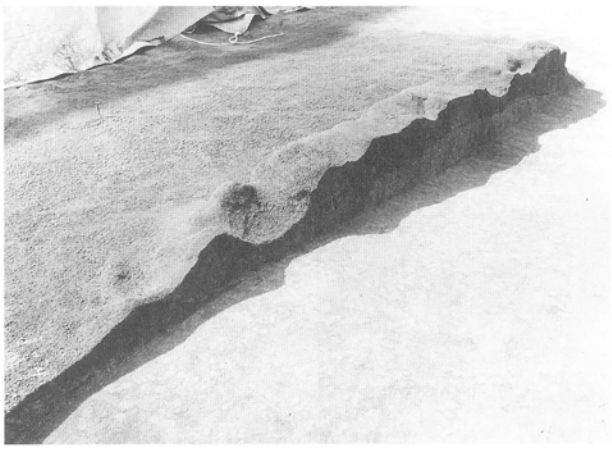


Fig. 6 SC45出土遺物実測図（1／4）

土器溜りSX39(Fig. 7)　SX39は調査区南東部で、西半部の生活遺構群から5m程の間隔をとって南北方向に、南端は調査区外に延びている。北側のSX40と組みで南北方向に延びている。東に下がる緩斜面に日常土器・祭祀土器・甕棺片と用途に関係なく破損品等、使用を終えたものを廃棄している。東端は終末期の住居SC44に切られるが、検出時は不明瞭で切り合いを見誤っている。現存長で4m・幅3mを測る。遺物量は多く、土器でコンテナ12箱分、住居同様、中期後半～末を示し、叩石11点・石錘1点を検出している。

出土遺物(Fig. 8)　9～12は丹塗磨研土器で、9は広口壺で口径32.4㎝・器高34.0㎝を測る。外底を尖底状に打ち欠いている。10は浅い鋤先口縁の高坏で口縁上面に暗文を施す。11は体部の深い高坏で口縁はL字に近く、内傾する。12は無頸壺で全面に丹塗磨研を施す。13は鉢で外面に粗いケンマを施す。14はボール状の直口の鉢で口径18㎝。外面はタテハケ後粗いケンマ、内面はヨコ板ナデ後粗いケンマを施す。口唇下外面に二ヶ所塊状の把手を貼付し縦方向に一孔を穿っている。半島系と思われ、胎土・焼成は他の弥生土器と変わらない。

Ph. 6　SX39(北から)



Ph. 7　SX39横断面(北西から)

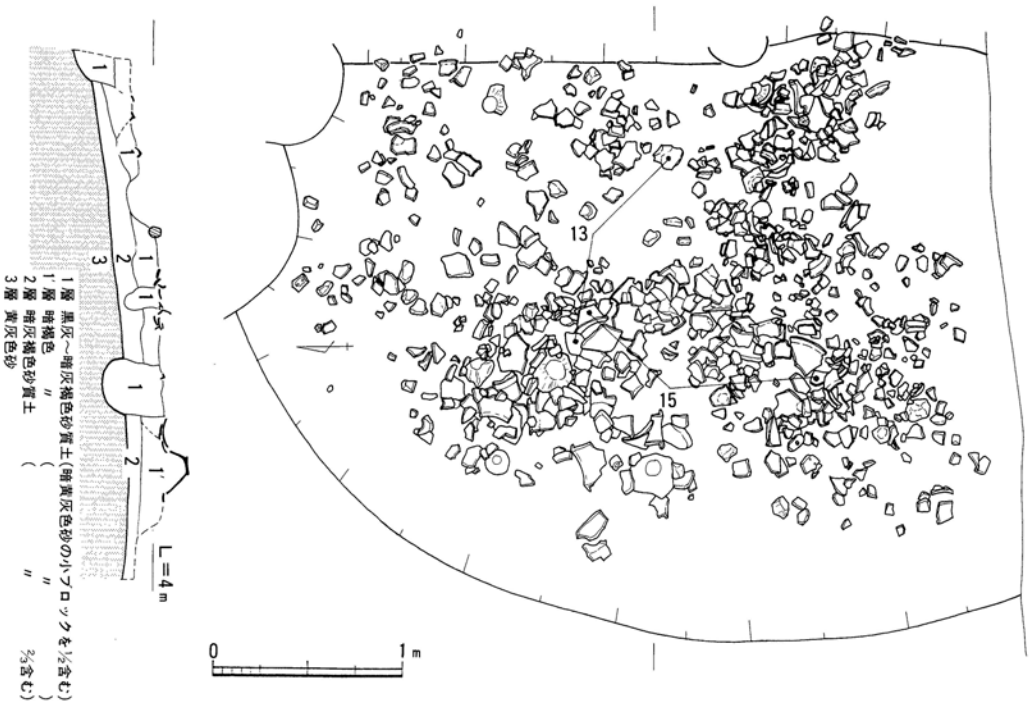


Fig. 7　SX39実測図(1/40)

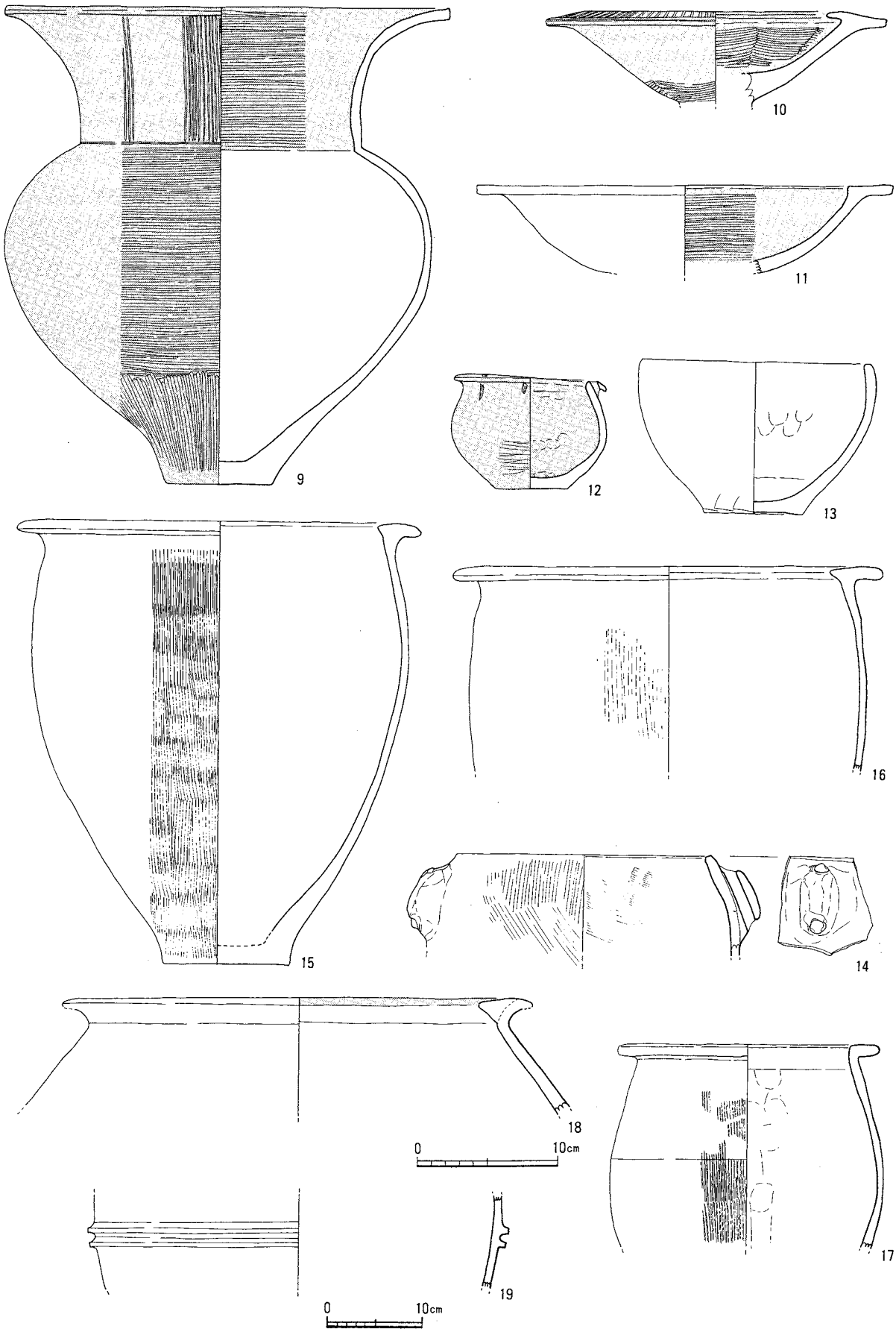
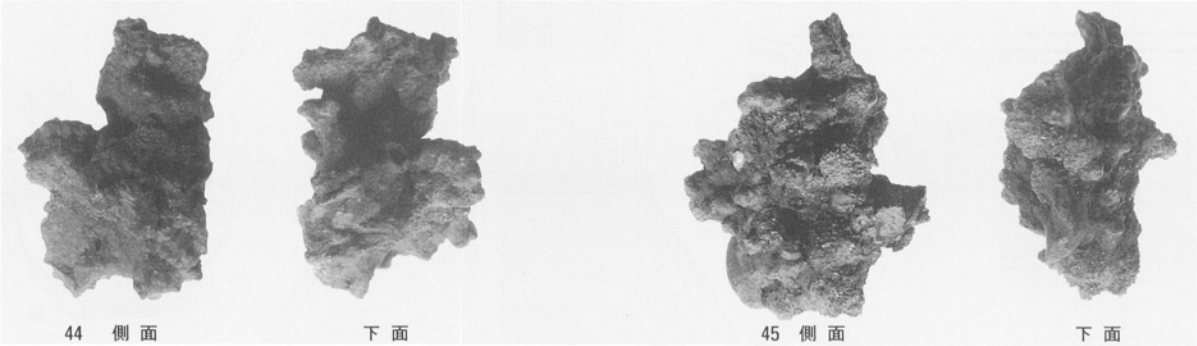


Fig. 8　SX39出土遺物実測図（1／4・1／6）

土器溜りSX40(Fig. 9)　SX40は調査区の北東端部に位置し、SX39と組みで北側を囲っている。北端部と東端部は調査区外に広がっているが現存長で東西6.5m、南北2.1m を測る。一部深さ10㎝程の浅い溝状を呈しているが、南端は緩傾斜となって境が明確でない。中央部に終末期の土構SK41が切り合っている。遺物はSX39程ではないが、同様に中期後半～末の磨研土器から支脚・甕棺片までが出土し、コンテナ12箱分の検出である。叩石は該期で全体的に目立ち、SX40でも11点検出している。石錘は1点検出。

ここで殊に注目されるのは3点の鉄塊系遺物と1片のガラス容器片の検出である。ただし残念なのは鉄塊系遺物は調査最終日に、調査区北側のH3グリッドでの壁面に入り込んだ土器を回収中に、ガラス片は調査終了後の土器水洗時に見出したもので、調査中に遺構内での明確な位置を確認したものではない。しかしコンテナ12箱分の土器中、混入と思われるものは終末期の土器片2片のみであり、状況的に弥生中期後半～末に属する可能性は極めて高い。

出土遺物（Fig. 10）　20～27は甕で、20・23は屈折口縁で20は口縁が長く23は短く厚目である。22・24は鋤先口縁で、21はこの中間に位置する。26は跳ね上げ口縁で、25は屈折口縁との中間の様相を示している。各口縁の破片数は20系が44片・23系が7片・22系が58片・21系が40片・26・25系は各1片で遠賀川以東地域との関連が示唆される。主体は20・21・22でそれぞれ3割以上を占めている。28～34は鋤先口縁の広口壺で、29・30・31・33・34は丹塗磨研土器である。33は鋤先が退化する。35・36は鉢で35は内側からの打ち欠きで穿孔がなされる。37は無頸壺の壺蓋で口径20㎝。38は支脚で内面が熱で爆ぜている。39・40は無頸壺で39は調整不明だが40は丹塗磨研である。41は甕蓋で内側からの打ち欠きの穿孔がある。42は軽石製の大形の浮子で中央に径3㎝の孔を両側から穿ち、復原で径20～28㎝を測る。



Ph. 8　鉄塊系遺物

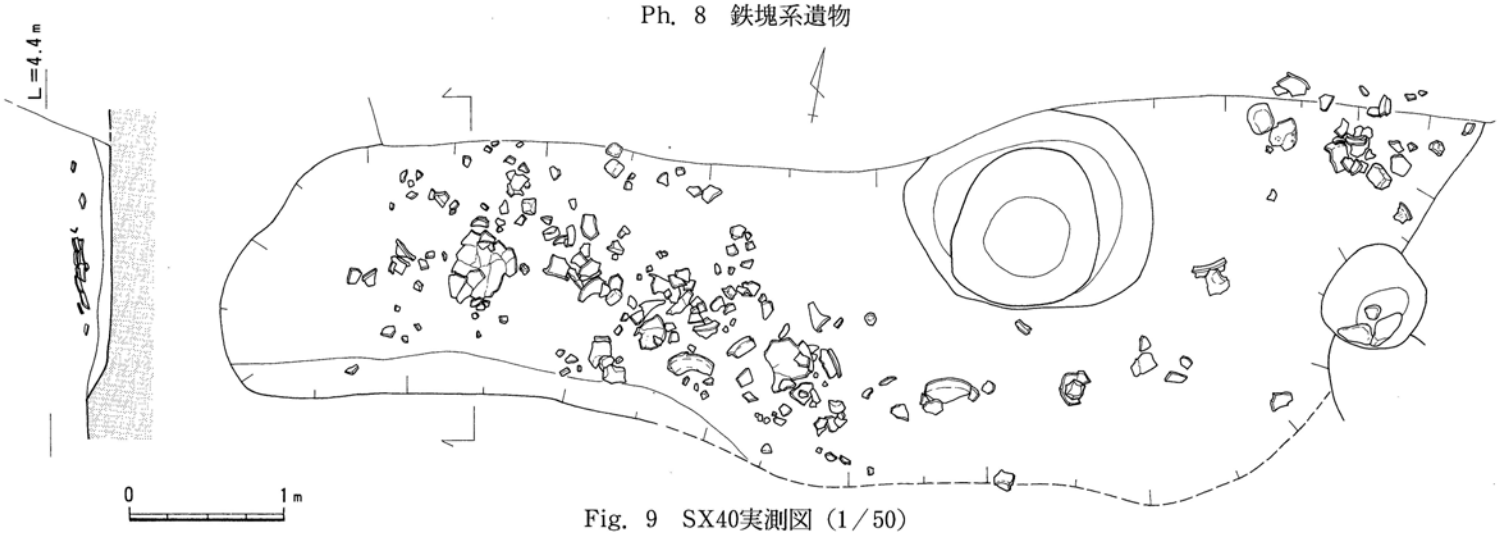


Fig. 9　SX40実測図（1／50）

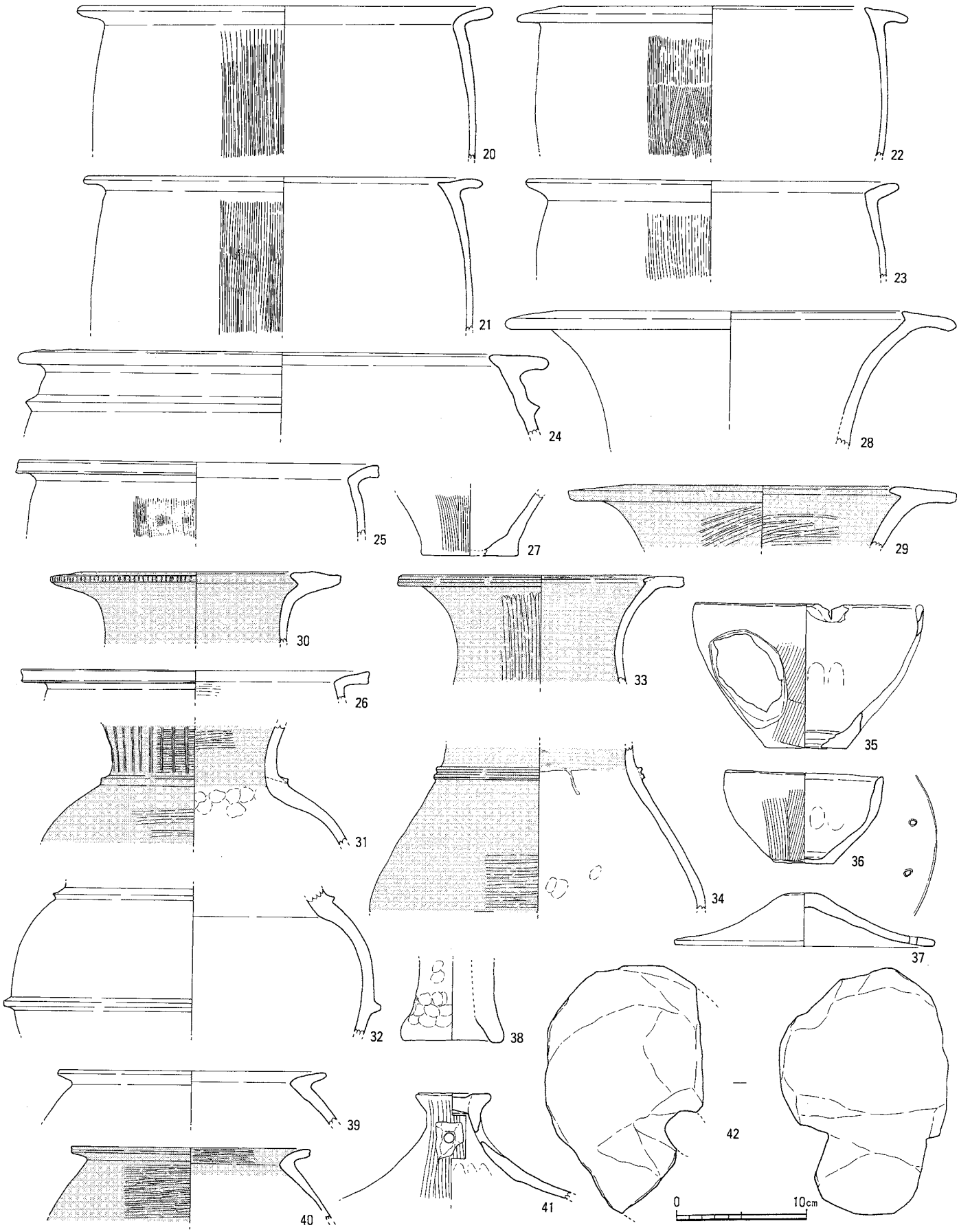


Fig. 10　SX40出土遺物実測図（1／4）

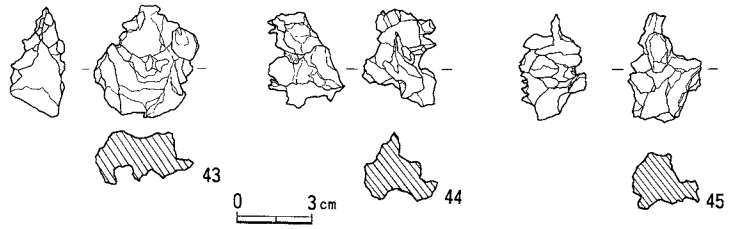


Fig. 11　出土鉄塊系遺物実測図（1／3）

Fig. 11は鉄塊系遺物で、3点出土している。43は5.7×5.0×2.8cmで96.5gを量る。全体に銹化し明茶褐色を呈し、下面は暗色。上面は平坦気味で3～5mmの粒状の突起がみられ、下面は9～7mmの木炭痕をかみ込む様に滓が滴下し凹凸が著しい。メタル度は低いが非常に重量感がある。44は5.2×3.8×3.7cmで54.6gを量る。1～10mmの木炭痕をかみ込み下面を中心に激しく滴下し、滴下粒はφ5mm程である。凹凸が激しく中央に空洞もある。45は5.5×3.7×3.4cmで40.6gを測る。上面にはφ0.1～2mmの小粒の突起がみられ、下面はφ5mm程で激しく滴下している。ともにメタルチェッカーは反応しない。

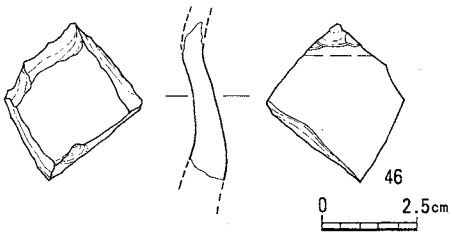


Fig. 12　出土ガラス片実測図（1／2）

46(Fig. 12) はガラス容器の小片である。上下4.3cm・左右3.7cm・厚さ4.5～9mmを測る。胴径8～10cm程の胴のゆるく張る如意形の口頸部をもつ容器の破片で四周は打ち欠いて破面がそのまま残り、加工痕はない。表面は全面が厚く銀化し、淡緑灰色でオパール現象を起こしている。表裏の一部は水洗時に汚れのこびりつきと間違い、こさぎ落してしまっている。これから見えるガラス本体はオリーブグリーンを呈し、透明で細かな気泡を若干含んでいる。

2）　弥生時代終末期の遺構

SC01(Fig. 13)　SC01は調査区北側中央部で検出された。隅丸長方形のプランで4.17×3.07mの小形の竪穴で、現存する深さは45cmである。主柱穴は長軸の中央に90cmの間隔を取って2本設けている。柱痕跡は径20cm前後のもので深さは約50cmである。壁溝は幅80cm以上で深さは20cm未満と、必要以上に広く、床面積の8割近くを占めており、壁溝を除いた面積は2.9㎡しかない。内部に炉もなく一般の住居とは考え難く、南に隣接するSC46に付随する小屋的な施設と考えた方が妥当と思われる。同様の遺構としては長径3

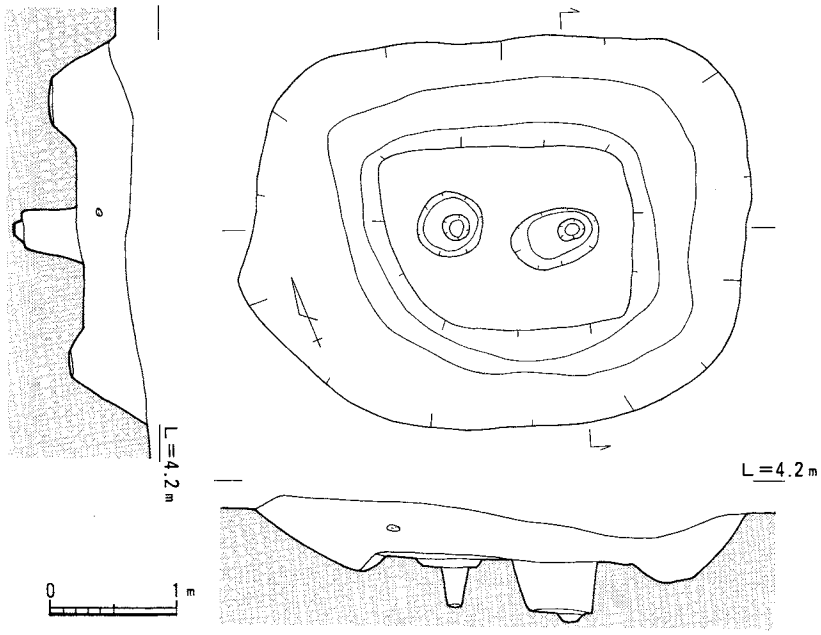


Fig. 13　SC01実測図（1／60）

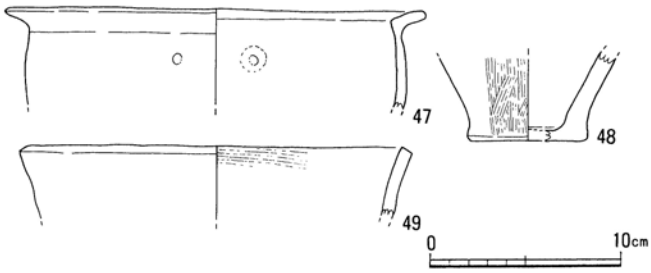


Fig. 14　SC01出土遺物実測図（1／4）

Ph. 9　SC01検出状況（南から）

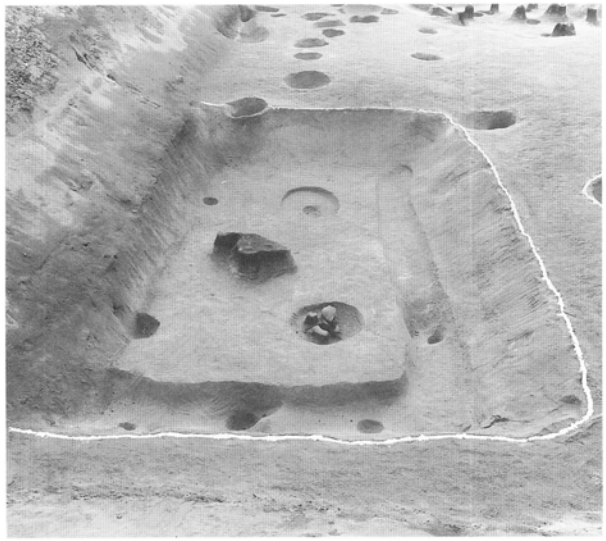
Ph. 10　SC01完掘状況（西から）

mのSK47と長径2.6mを測るSK22がある。遺物は全て床面から20cm以上浮いた状態で検出され、量も少い。時期的には中期の土器が多いが、2本柱のプラン・滑石製紡錘等からして、終末期の時期に属すると思われる。

出土遺物（Fig. 14）　47・48は中期後半の甕で、口径22.2cmを測る。口縁下に外側からの打撃によって、一孔を穿っている。48は底部で底径6cm。内部に炭化物が残る。49は終末期の直線的に延びる甕の口縁部で、内面はヨコハケ後ナデ。

SC44（Fig. 15）　SC44は調査区南東端部に位置し、中期の土器溜りSX39を切っている。南端が調査区外に延びるが、現存で6.63×4.1mの方形プランの竪穴住居で、本調査区内で最大規模である。深さは50cmを測る。主柱穴は4本と思われ、北壁から2m程離れた長軸方向に2.75m間隔をとって設けられている。柱痕跡は径30cm前後と太目で深さ55cmを測る。平坦な床面を設けた後、南東部に3.5×1.8m高さ40cm程のベッド状遺構を設置している（土層6～8層）。遺物の大半はこの外側の黒褐色覆土（2～4層）中に廃棄された状態で検出される。

出土遺物（Fgi.16）　50・51は丸底の鉢でともに外面はタテハケ後下半をタテケズリ、内面はヨコハケ調整で、口径は51が15.3cm器高7.7cmと深く、52は口径17.6cm器高6.2cmで浅い形態となる。52・53は小形の丸底壺で、52は口径13.8cm器高15.3cm、53は一回り小さく口径11.6cm器高13.6cmを測る。52は体部外面をタテハケ後、下半をケズリ調整後板でナデる。内面はハケ調整。53はタテハケ後口縁内外はヨコヘラナデ、内面体部はケズリ後ナデを施す。54・55は脚付鉢で、54の体部は51の鉢と同じプロポーションで、調整も同様であり、これに径5.5cmの太目の脚を貼付したもので口径16.5cm。55は直線的に延びる小さな体部で、口径13.6cm・器高7.3cmの尖底気味の体部に径2.6cmの細い脚を貼付する。外面はタテハケ後ナデ、内面はヨコハケ後粗いタテケンマを施す。56～58は高坏で、いずれも屈曲して長く外反する口縁部が体部の1／2程を占めるタイプである。56は口径28.6cm器高21.1cmを測る。体部外面下半はヨコケンマ・上半はタテハケ、内面はタテケンマを施す。57は口径29.5cm器高18.1cmで、屈曲がきつく底面はほとんど平底になっている。体部外面下半はヨコハケ、上半はヨコハケ後粗いタテケンマを施す。58は大形の高坏で口径35cm、残存高で13.7cmを測る。体部の調整は外面下半はヨコケンマ、上半はタテケンマを施す。内面はタテケンマを施す。59～61は甕で、屈曲して直線的に延びる口縁に倒卵形の胴部、尖



Ph. 11　SC44検出状況（東から）

Ph. 12　SC44完掘状況（北東から）

底気味の丸底を呈するものである。59は口径23.2cm器高38.2cm胴径27.8cmを測る。調整は外面はタテハケ、内面は口縁部はヨコハケ、以下はタテハケを施す。著しい火熱を受け胴部内外下半は器表が剝落する。薄い板状の剝離があり、製塩に用いられた可能性がある。60は口唇が若干跳ね上げ気味になる甕で口径22.2cm胴径26.8cmを測る。外面はタテハケで口縁部はヨコにナデる。内面はナデ調整。胴部内面は鮮明な淡赤桃色に発色し製塩の可能性が考えられる。61は口径23.2cm胴径27.8cmで外面の調整は粗いタテハケ、内面は口縁はヨコハケ、以下はナナメハケ。同じく内面が淡桃色に発色する。

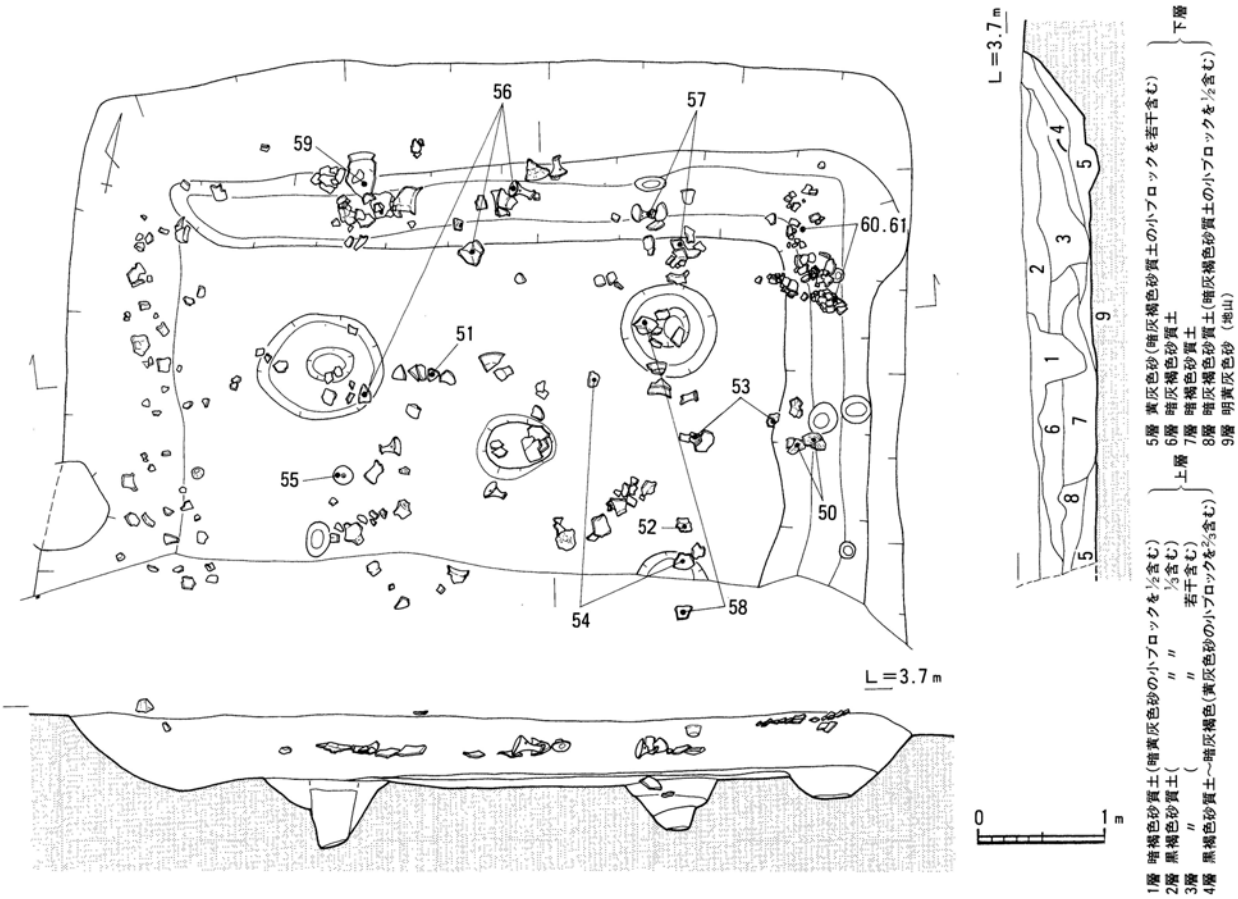


Fig. 15　SC44実測図（1／60）

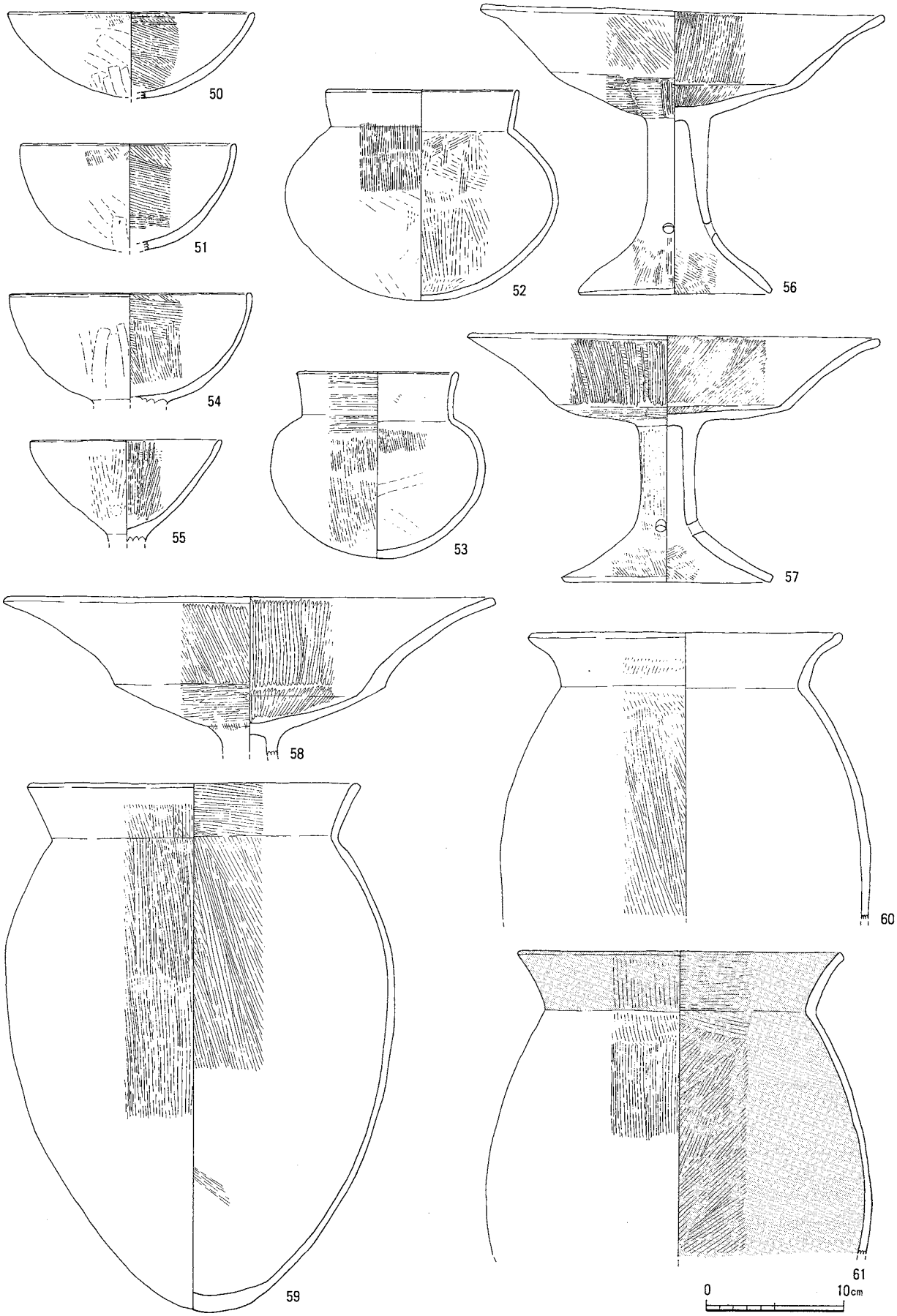


Fig. 16　SC44出土遺物実測図（1／4）

SC46(Fig. 18)　SC46は調査区のほぼ中央に位置し、北東1.7mにSC01がある。長さ5.5m幅4.25mの長方形のプランで、深さは現存で55cmを測る。主柱穴は長軸の中央に2.75mの間隔をとって2本設けており、深さは浅く30cm程である。平面形・構造ともにSC01と同様である。土層断面でわかる通り幅30cm程で深さ10cm未満の浅い壁溝を巡らせているが溝が浅かったため清掃時に削ってしまい平面に残っていない。主柱穴が切り合っており1度建替えが行われている。遺物は弥生終末期の土器を少量と打欠石錘を1点・叩石を1点床面から30cm程浮いた状態で検出した。炉は確認されない。

出土遺物（Fig. 17）　62は手捏の小形の鉢で口径7.6器高4.8cmを測る。内外ともに指頭圧痕が著しく残る。63は丸底の鉢で口径10.8器高4.4cmを測る。外面は横方向のケズリ、内面はナナメのハケ調整を施す。64は丸底の小形壺で、口径8.6器高9.8胴径10.5cmを測る。外面胴部は粗いタテハケ、口縁はヨコハケ、内面体部はヨコハケ後ケズリを施しナデる。口縁はヨコ板ナデ。65は高坏の坏部で口径27.8cm、残存高で6.8cmを測る。口縁の外反は1／2をこえて長く延び屈曲の度合いはゆるくなっている。外面はヨコナデ、内面は下位はヨコハケ後放射状のタテハケ、上位はヨコハケを施す。

3）　弥生時代中期末～後期初頭の遺構

溝状遺構SD23の1条のみで、調査区南西部に位置し中期後半～末のSC45を切っている。検出した遺物は「く」字口縁の甕と丹塗磨研の壺・支脚の小片である。

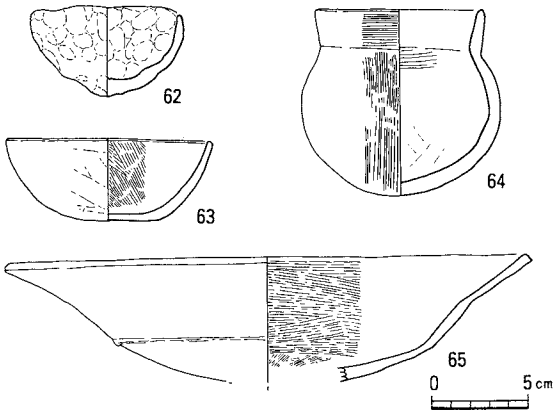


Fig. 17　SC46出土遺物実測図（1／4）

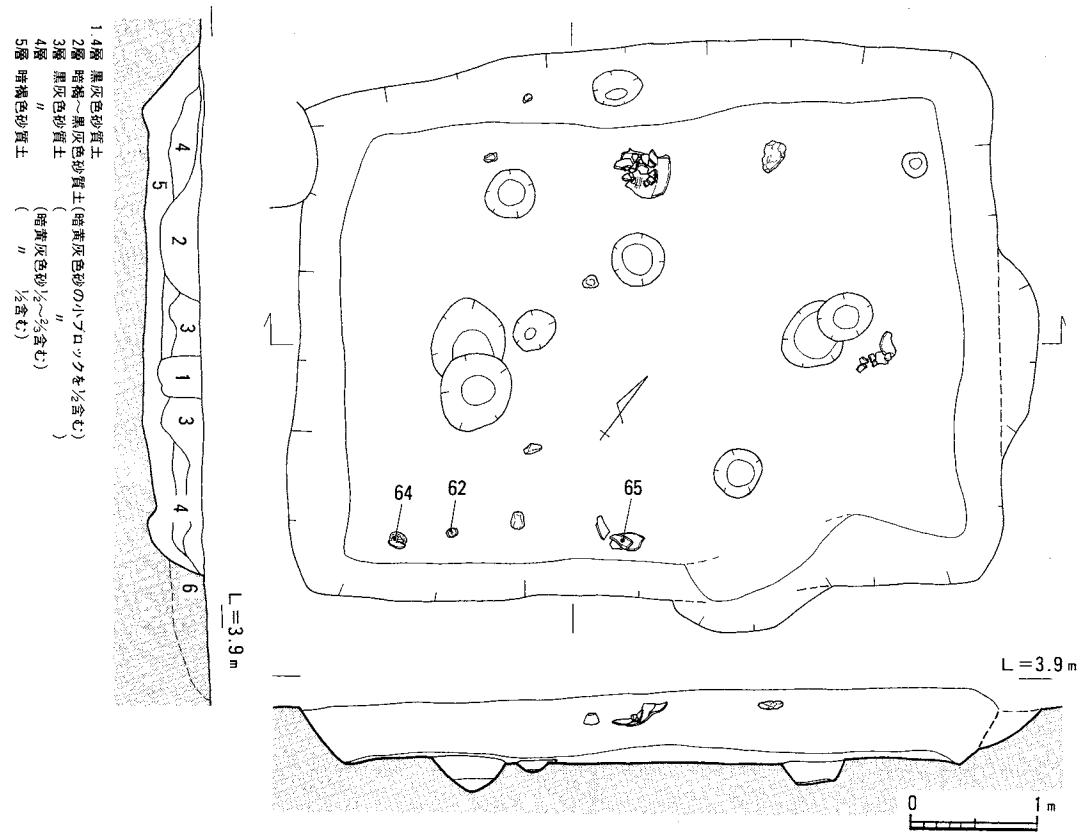
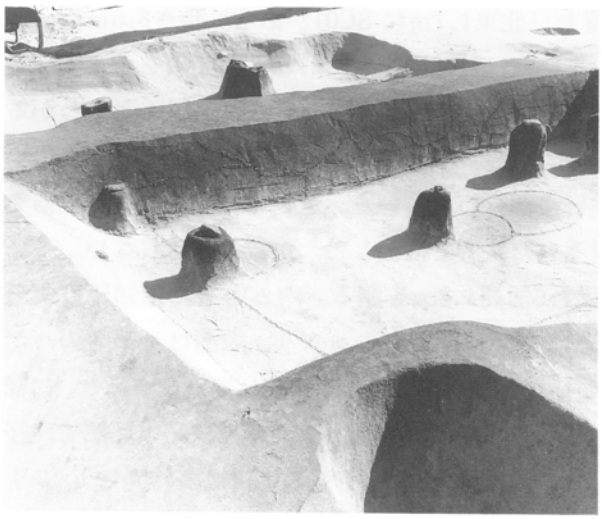


Fig. 18　SC46実測図（1／60）



Ph. 13　SC46検出状況（西から）

Ph. 14　SC46完掘状況（南東から）

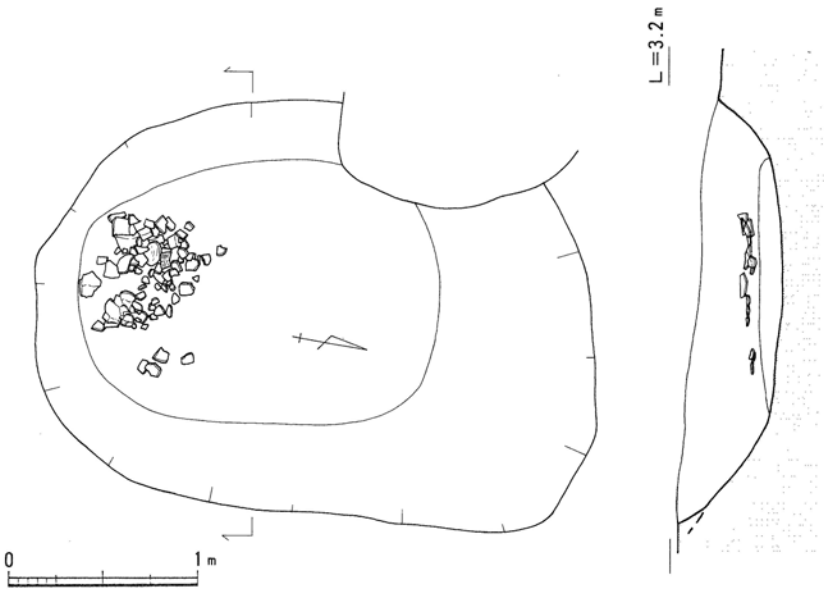


Fig. 19　SK09実測図（1／40）

3．古墳時代の調査

古墳時代初頭の遺構が土壙２基のみで調査区北半の東西端にそれぞれ位置する。

SK09(Fig. 19)

SK09は調査区の北東端部に位置する楕円形の土壙で長径2.95短径2.16mを測る。現存で深さ45cmを測り、遺物は南側の床面から20cm程上位で廃棄された状態で検出される。

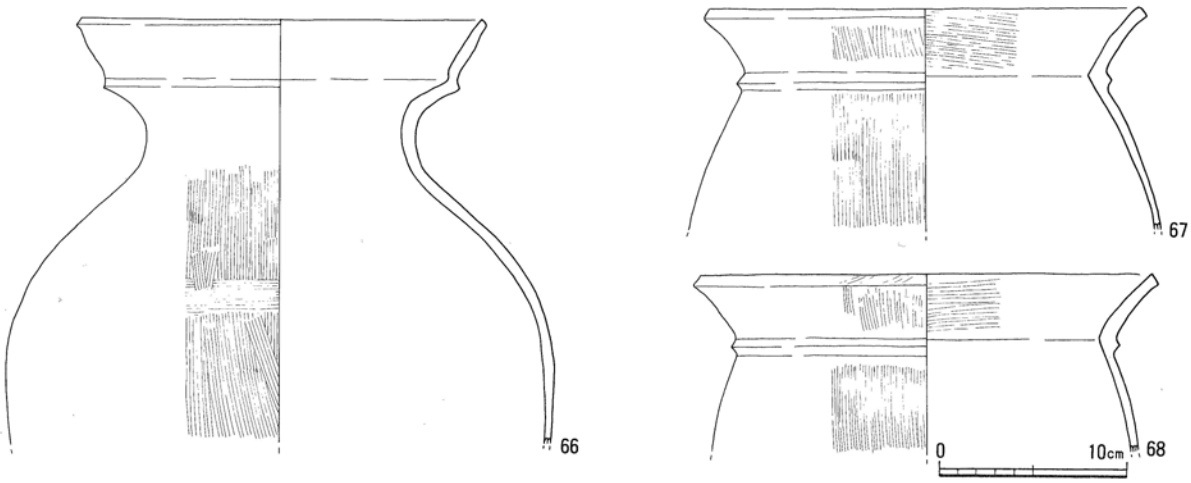


Fig. 20　SK09出土遺物実測図（1／4）

Ph. 15　SK09検出状況（南から）

Ph. 16　SD05土層断面（西から）

出土遺物（Fig. 20）　66は山陰系の土師器甕で、口縁部は二重口縁で接合部の外面が稜をなし、直線的に延びて外反する。口径21.2㎝胴径29㎝を測る。外面口頸部は横ナデで、以下はタテハケ、肩部は二条分程ヨコにかき、文様化している。内面は口頸部はヨコナデ、以下不鮮明だがヨコケズリを施している。西新町第２調査13号住居址からも庄内式新段階併行期の甕と供判して出土している。67・68は在地系の甕で「く」字口縁の頸部に突帯を一条施す。67は口径22.8㎝。外面はタテハケ、内面下位はナデ、口縁部はヨコハケを施す。68は口径24㎝で外面はタテハケ、内面下位はナデ、口縁部はヨコハケで口唇内側を強くナデつけ跳ね上げ気味になっている。

４．その他の遺構

SD05・12　SD05・12は調査区の南側を東西方向に掘削する溝で、方位はN—78°—Eにとる。幅1.5ｍ、深さ約40㎝を測る。SD05とSD12は９ｍ程間隔をあけて掘削されており、SD05は東隣の６次調査区に、SD12は西隣の９次調査区で確認されており延べ60ｍにわたって検出されている。

SD05・12ともに検出される遺物はほとんどが弥生中期の土器片であるが、SD12で１片の平瓦が検出されている。

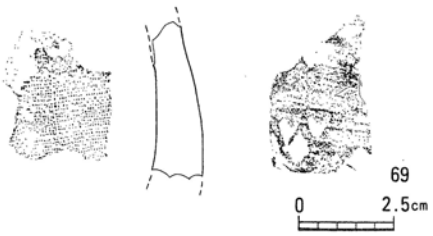
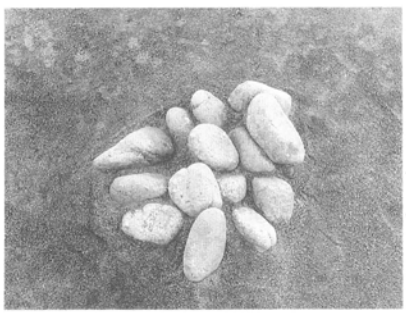


Fig. 21　SD12出土瓦（1／2）

出土遺物（Fig. 21）　69は平瓦の小片で残存部で6.5×4.5㎝を測り厚みは20～13㎜を測る。上面に布圧痕が残り下面は斜格子叩き後タテケズリを施す。色調は灰～暗灰色を呈し、胎土はφ4㎜以下の小礫を少量含む。

SX43(Fig. 22)　SX43は下面のSC45東側で検出された礫の集石で、20個の浜礫を径20㎝程の範囲に２～３段積んでいる。焼成痕・使用痕はない。調査区内の叩石と同程度の大きさであり、叩石用に集積したものと思われる。調査区内からは両小口を良く使用する叩石が38点出土する。石は砂岩で最大6.5kg浜礫で8.5kgの石が持ち込まれ、総量で75kgを測る。



Ph. 17　SX43（南から）

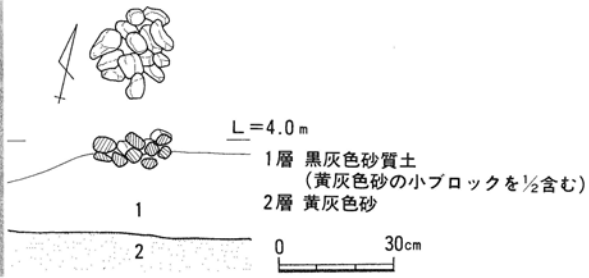


Fig. 22　SX43実測図（1／20）

5．その他の遺物（Fig. 23）

70は西北部の包含層中から出土した半島無文土器である。小片のため復原に若干無理があるが、口径16.5cm・胴径18.4cmを測る。口縁部は粘土を外面に折り込んで成形され、断面三角形で口縁外面が幅1.5cm程の帯状となる。整形が粗く全体的に凹凸が激しく、外面は口縁部はヨコナデ、以下に粗いナデ、内面は口縁をヨコナデ、以下をヨコケズリ後ゆるくナデる。色調は淡灰褐～淡赤褐色で胎土はφ2mm前後の大粒の砂粒を多く含む。形態・整形からして半島からの搬入品の可能性が高い。

71はSC44西半部からの出土で、SX39の遺物と思われる。弥生中期後半～末の丹塗磨研脚付注口付壺の注口基部の小片で径22cmを測る。那珂遺跡20次調査のSD01出土品に同様の完形品がある。

72はB2グリッド包含層下層出土の晩期初頭の精製浅鉢土器の肩部小片である。1.5mm前後の砂粒を多量に含み、淡黄褐色を呈する。器表は磨滅している。

73はSD12に混入の投弾で全長3.0・径1.9cmを測る。胎土には雲母粒を若干含み重量は8.6g。

74～76は弥生土器片を円形に打ち欠いて整形した円盤状土製品。74はDIグリッド包含層下層出土で6.3×6.1×1.2cmを測る。重量54.4g。75はC2グリッド包含層下層出土。4.5×4.3×1cmを測り、重量22.2gを量る。76はE2グリッド包含層下層出土で3.2×3.0×1.2cmを測る。重量13.2g。

77・78は磨製石斧で77はC2グリッド包含層下層出土。蛤刃石斧で現存で7.6×4.5×2.0cmを測る。玄武岩製で小形のものである。78は扁平石斧で上面検出面出土。刃部は磨滅しているが片刃石斧と思われる。現存で5.0×3.7×1.2cmを測る。片岩製。

79・80は滑石製の有溝石錘で、79はSC44出土。6.4×3.3×1.9cmで65.4gを測る。80はSX39出土。有孔球形の大形石錘の破片再利用で、8.7×5.5×4.0cmを測る。重量248.5g。滑石片岩製。

81～83は片岩製の紡錘車で、81は弥生終末期のSC01出土。5.2×5.5×1.7cmを測り、重量88.8g。

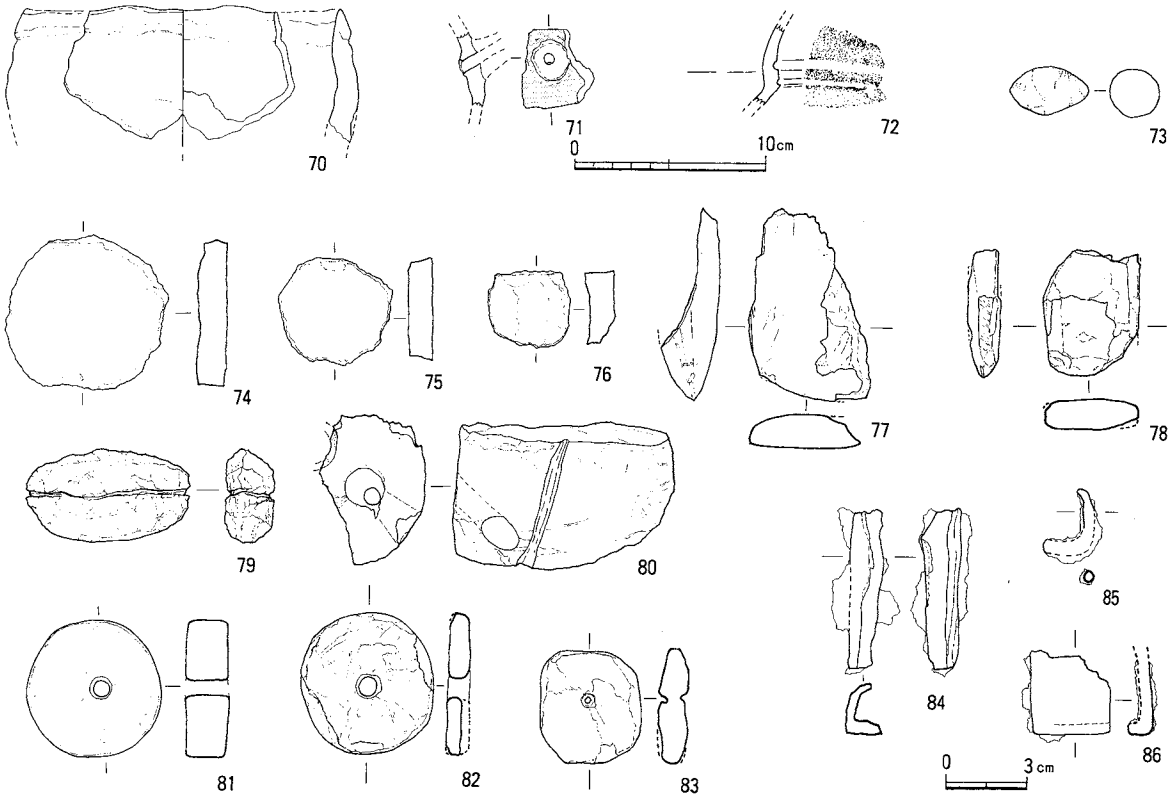


Fig. 23　その他の遺物（1／4、1／3）

82は弥生中期後半～末のSC45出土。径5.2～5.6cmを測り、81と変わりはないが厚みがなく、0.9cmで重量は37.5ｇで81の半分弱しかない。同じく片岩製。83はC5グリッド包含層下層からの出土で4.0×4.5×1.2cmで寸法は82に近い。未製品で中央に径6mm程の穴を両側から穿孔にかかっているが、貫通していない。

84～86は鉄器である。84は土器溜SX40出土。6.5×2.5×1.7cmの2面が直角をなす縁金具状の鉄器である。85は北東部包含層出土の釣針形鉄製品で半折しており、残存で3.8×3.0cmで径5mmの円形である。86は中期の住居址SC45出土の鉄片で、84同様2面が直角をなし、現存で3.6×3.4×0.8cmを測り、84より厚目の縁金具状の形態を示している。

Ⅳ. 小　　結

今回の調査では弥生中期後半～末の住居址1軒・土壙10基・溝状遺構3条・土器溜り2基、中期末～後期初頭の溝状遺構1条、終末期の住居址3軒・土壙18基、古墳時代初頭の土壙2基・古代の溝2条・土壙1基を検出した。

殊に住居址を含む中期の遺構は藤崎地区を合わせて初の生活遺構群の検出であり、本調査区西半部から西隣の9次調査区に広がっているのが確認された。甕棺墓群との関連でみてみると、墓群は現在までのところ本調査区から東30mの第10調査区が西限であり、中間の6次調査区からは同時期の甕棺墓も生活遺構も検出されず、空白地帯となっている。一方生活遺構は本調査区から西に広がり、この中間に土器溜りSX39・40が約3mの幅を開けて南北方向に広がっている。破損した日常土器・使用を終えた祭祀土器等、その使用目的を遂げたものを用途に関係なく遺棄しており、西の生者の空間と東の死者の空間との境界をなしている様に受けとめられる。

また土器溜りSX39から検出した鉄塊系遺物3点は鉄生産を検証する上で極めて重要な資料である。

現在までのところ、弥生時代で確認される製鉄関連の遺構・遺物では本調査区と同時期の春日市赤井手遺跡出土の鍛冶滓が精錬鍛冶滓で本格的鉄生産に一歩先行した精錬鍛冶段階の存在を示す最古の資料であるが、今回検出した資料はさらに高度な技術を要する製錬工程を示す遺物である。現段階では鉄生産の開始期は弥生時代後期説から古墳時代後期説まであるが、(註1)成分分析を待たないと確定できないが、自国生産物とすれば鉄生産開始期を一気に中期後半～末に引き上げるものとなり、また大陸からの鍛冶原料の鉄素材だとしても、棒状・板状の地金として奨来していたとする鉄素材の他に製錬段階の小鉄塊を鉄素材として搬入していたとする新しい展開がみこまれる。

同SX40から出土したガラス容器も重大な資料で、弥生時代出土のガラス製品は玉類・璧等の装飾品がほとんどで、弥生時代のガラス容器の出土は、山口県美祢郡秋芳町の中村遺跡4号住居からの出土品が唯一のものと思われるが、(註2)本例で二例目となり、これも分析を待たないと明確な事は言えないが、搬入品としてさらに時期を逆のぼらせる資料と思われる。

70の無文土器は半島後期の時期でSX40の中期後半～末の時期とは矛盾しない。ともに大陸からの搬入を示唆している。

鉄塊系遺物もガラス片も今回は分析に回す余裕がなく、次回の西新9次の調査報告書に分析結果を記載する予定である。

註1)　大澤　正巳　『春日市史　上巻』　1995年

註2)　財団法人山口県教育財団　山口県教育委員会　『中村遺跡』　山口県埋蔵文化財調査報告書　第100集　1987年

Tab.1　遺物一覧表（1）

挿図	番号	器種	地点	出土地	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
Fig.6	1	甕		SC-45	暗赤褐色	砂粒を若干含む、やや荒い多孔質	ヨコナデ	ヨコナデ	外口径33.2cm 内口径25.8cm
	2	甕		SC-45	暗褐色～淡赤褐色	砂粒をやや多く含む	ヨコナデ、ナデ	ナデ	外口径23.5cm 内口径18cm
	3	甕		SC-45	黒色～黒褐色	石英、長石、雲母を含む	タテハケ	ナデ	底径10.6cm
	4	鉢		SC-45西半	暗赤紫色	砂粒をやや多く含む			口径22cm
	5	壺		SC-45東半	濃暗赤褐色	砂粒を多く含む	ヨコナデ	ヨコナデ	外口径25.8cm 内口径17cm、丹塗、暗文
	6	壺		SC-45	濃暗赤褐色	砂粒をわずかに含む	ヨコナデ	ヨコナデ	外口径17.0cm 内口径11.8cm、丹塗、暗文
	7	鉢		SC-45	明赤褐色	砂をほとんど含まない	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	口径18cm
	8	器台		SC-45	淡褐色～暗褐色	砂粒を若干含む	ヨコナデ、タテハケ	ヨコナデ	口径9.4cm
Fig.8	9	壺		SX-39	濃赤褐色	砂をほとんど含まない	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ、ナデ	口径32.4cm 器高34cm、丹塗
	10	高坏		SX-39	濃赤褐色	砂粒含む	ヨコナデ、研摩	ヨコナデ	外口径24cm 内口径15.8cm、丹塗、暗文
	11	高坏		SX-39	淡赤褐色～濃赤褐色	砂粒若干含む、細かい粘土	ヘラミガキ	ヘラミガキ	外口径29.4cm 内口径23cm、丹塗
	12	壺		SX-39	淡橙色～赤色		ヨコ方向研摩	指オサエ	口径10.8cm 器高8.1cm、丹塗
	13	鉢		SX-39	淡黄灰色	砂粒少量含む	ヨコナデ、粗いミガキ	タテナデ、ナデ	口径16.4cm 口径16.4cm
	14	鉢		SX-39	淡黄褐色	砂粒を多く含む	ヨコナデ	ヨコナデ	
	15	甕		SX-39	暗褐色～明淡褐色	砂粒を若干含む	ヨコナデ	ナデ	外口径28.5cm 内口径22.4cm 器高31.4cm
	16	甕		SX-39	明薄褐色～明薄赤褐色	砂粒を多量に含む	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	外口径30.6cm 内口径23cm
	17	壺	G-6	SX-39	浅黄色～黄灰色	雲母・石英を含む	ヨコナデ	指オサエ、ナデ	口径18.4cm
	18	甕		SX-39	明淡褐色	砂粒多量に含む	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	口径33.2cm
	19	不明	G-5	SX-39	明薄褐色	荒砂粒を多量含む	ヨコナデ、ナデ	ナデ	
Fig.10	20	甕		SX-40	薄明赤褐色	砂粒を多く含む	タテハケ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	外口径32cm 内口径26cm
	21	甕	G～H-3	SX-40	明淡赤褐色	緻密、石英砂粒を含む	タテハケ、指ナデ	ヨコナデ、ナデ	外口径30.6cm 内口径23.8cm
	22	甕	G～H-3	SX-40	薄褐色～褐色	石英、長石粒を多く含む	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	外口径30cm 内口径22.4cm
	23	甕	G-3	SX-40	明薄褐色	緻密、石英、長石を含む		ヨコナデ、ナデ	外口径28.6cm 内口径26.6cm
	24	甕	G～H-3	SX-40	明薄褐色	砂粒を多く含む	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	外口径40.1cm 内口径31.6cm
	25	甕	I-3	SX-40	明薄褐色	緻密、黒色粒を含む	ヨコナデ、タテハケ	ヨコナデ、ナデ	外口径27.8cm 内口径23.2cm
	26	甕	H-3	SX-40	薄褐色	緻密、黒色粒を含む	ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコハケ	外口径26.6cm 内口径21.4cm
	27	甕	G～H-3	SX-40	明薄褐色～暗褐色	細粘土	タテハケ	ナデ	底径7.4cm
	28	壺		SX-40	暗灰褐色	砂粒を多く含む	ヨコナデ	ヨコナデ	口径26.6cm
	29	壺	G～H-3	SX-40	赤褐色	荒粘土	ヨコナデ	ヨコミガキ	口径20.4cm、丹塗
	30	壺	G-3	SX-40	明赤褐色	細粘土	ヨコナデ、刻目	ヨコナデ、ナデ	口径16cm、丹塗
	31	壺	G～H-3	SX-40	赤褐色～明薄褐色	細粘土	ヨコミガキ、ヨコナデ	ヨコミガキ、ナデ	丹塗
	32	壺	G～H-3	SX-40	薄褐色～暗褐色	砂粒を多く含む	ヨコナデ、ナデ	ナデ	
	33	壺	G～H-3	SX-40	赤褐色	砂粒を含む粘土	タテミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	丹塗
	34	壺	G-3	SX-40	赤褐色	砂粒を含む	ヨコナデ、ヨコミガキ	ナデ、指圧痕	丹塗
	35	鉢	G-3	SX-40	淡黄灰色	砂粒少量含む	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、指圧痕	口径18.4cm 器高11.2cm
	36	鉢	G-3	SX-40	淡黄灰色	砂粒少量含む	ヨコナデ、タテハケ	ナデ、指圧痕	口径12.2cm 器高6.8cm
	37	壺蓋		SX-40	明薄褐色	砂粒を多く含む	不明	ナデ	口径20cm 器高4.1cm
	38	支脚		SX-40	明薄褐色	砂粒を少量含む	ナデ、指圧痕	ナデ	底径7.4cm
	39	甕	G-3	SX-40	明薄褐色	やや荒い粘土	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	外口径20.6cm 内口径15.2cm
	40	壺	G-3	SX-40	薄褐色～濃赤褐色	石英砂粒を含む細粘土	ヨコナデ、ヨコミガキ	ヨコナデ、ヨコミガキ	口径18.4cm、丹塗
	41	蓋	G～H-3	SX-40	淡黒灰色	砂粒を含む	ナデ、ハケ	ナデ	内からの穿孔
	42	浮子	G～H-3	SX-40	明褐色	軽石			径20～28cm
Fig.11	43	鉄塊系遺物	H-3	SX-40	暗赤褐色				96.5g 5.7×5.0×2.8cm
	44	鉄塊系遺物	H-3	SX-40	明赤褐色				54.6g 5.2×3.8×3.7cm
	45	滴下滓	H-3	SX-40	明赤褐色				40.6g 5.5×3.7×3.4cm
Fig.12	46	ガラス容器		SX-40	淡緑灰色～オリーブグリーン	細かな気泡若干含む			径8～10cm

挿図	番号	器種	地点	出土地	色調	胎土	外面調整	内面調整	備考
Fig.14	47	甕		SC-01	明薄褐色	砂粒を多く含む	不明	不明	
	48	底部		SC-01	明薄褐色～黒色	砂粒を若干含む	タテハケ目		底径6cm
	49	甕		SC-01	黒色	砂粒を若干含む	ヨコナデ	ヨコハケ、ナデ	口径19.6cm
Fig.16	50	鉢		SC-44	淡赤褐色	砂粒を若干含む	タケハケ、横ケズリ	ヨコハケ	口径17.6cm
	51	鉢		SC-44	明褐色	砂粒を若干含む	タケハケ、荒いナデ	ヨコハケ	口径15.3cm
	52	壺		SC-44	明薄赤褐色	砂粒を若干含む	タケハケ、右方向ケズリ	不足方向ハケ、タテハケ	口径13.8cm 器高15.3cm
	53	壺		SC-44	淡赤褐色～明褐色	砂粒を若干含む	ヨコナデ、タテハケ	タテハケ、ヨコハケ、ケズリ後ナデ	口径11.6cm 器高13.6cm
	54	脚付鉢		SC-44	薄淡褐色	砂粒を多く含む	ナデ、タテケズリ	ヨコハケ、タテハケ	口径16.5cm
	55	脚付鉢		SC-44	明赤褐色	砂粒を若干含む	タテハケ、ナデ	ヨコハケ、タテミガキ	口径13.6cm
	56	高坏		SC-44	明薄赤褐色	細かい粘土	指押さえ、ナデ、タテハケ	タテミガキ、径方向ミガキ	口径28cm 器高21.1cm 底径13.6cm
	57	高坏		SC-44	明薄赤褐色	砂粒を若干含む	ヨコハケ、タテミガキ	タテミガキ	口径29.5cm 器高18.1cm 底径14.8cm
	58	高坏		SC-44	薄赤褐色	細かい粘土	タテミガキ、ヨコミガキ	タテミガキ	口径35.0cm
	59	甕		SC-44	暗灰褐色～薄淡灰褐色	砂粒を若干含む	タテハケ	ヨコハケ、タテハケ	口径23.2cm 器高38.2cm
	60	甕		SC-44	淡赤桃色	砂粒を多く含む	タテハケ、ヨコナデ	ナデ	口径22.2cm
	61	甕		SC-44	明黄褐色～明薄赤褐色	砂粒を多く含む	タテハケ	ヨコハケ、ナナメハケ	口径23.2cm 丹塗の痕
Fig.17	62	鉢		SC-46	明褐色～薄赤褐色	細かい粘土	指頭圧痕	指頭圧痕	口径7.6cm 器高4.8cm
	63	鉢		SC-46	明褐色～暗褐色	砂粒を若干含む細かい粘土	横方向のケズリ	ナナメハケ	口径10.8cm 器高4.4cm
	64	小形壺		SC-46	暗淡赤褐色	砂粒を若干含む	タテハケ	ヨコハケ、ケズリ、ナデ	口径8.6cm 器高9.8cm
	65	高坏		SC-46	明赤褐色	細かい粘土	ヨコナデ	ヨコハケ、タテハケ	口径27.8cm
Fig.20	66	甕		SK-09	明薄褐色	石英、長石粒を若干含む	ヨコナデ、タテハケ	ヨコナデ、ヨコケズリ	口径21.2cm
	67	甕		SK-09	黒褐色～灰褐色	石英、長石粒を多く含む	タテハケ	ヨコハケ、ナデ	口径22.8cm
	68	甕		SK-09	黒～淡褐色	石英粒を多く含む	ヨコナデ	ヨコハケ、ナデ	口径24cm
Fig.21	69	平瓦		SP-12	灰～暗灰色	小礫を少量含む	上面布圧痕	内面釘格子叩、タテケズリ	
Fig.23	70	無文土器	西北部	包含層	淡灰袖～淡灰褐色	2㎜前後の砂粒を多く含む			口径16.5cm
	71	壺	西半部	SC-44	暗赤色～明黄褐色	1.5㎜の砂粒を若干含む			脚台付注口付壺
	72	不明	B-2	包含層・下層	淡黄褐色	1.5前後の砂粒を多量に含む			縄文晩期精製土器
	73	投弾		SD-12	赤褐色～黄灰色	雲母微粒を若干含む			
	74	円盤状土製品	D-1	包含層・下層	褐灰色～灰オリーブ色	石英・雲母微粒を多く含む			土器片利用
	75	円盤状土製品	C-2	包含層・下層	黒褐色～褐灰色	雲母微粒を若干含む			土器片利用
	76	円盤状土製品	E-2	包含層・下層	暗灰色～褐灰色	石英雲母微粒を若干含む			土器片利用

Tab.2 遺物一覧表（2）

挿図	番号	器種	類別	地点	出土地	石材	法量（長×幅×厚cm）	重量（g）	備考
Fig.23	77	磨製石斧	石製品			玄武岩	残存長7.6	62.14	
	78	磨製石斧	石製品	上面	検出面	片岩	残存長5.0×3.7	31.80	
	79	有溝石製沈子	石製品		SC-44	滑石片岩	6.4×3.3×1.9	65.44	
	80	有溝石製沈子	石製品	G-6	SX-39	滑石片岩	8.7×5.0＋α×4.0	248.53	
	81	紡錘車	石製品		SC-01	片岩	5.2×5.5×1.7	88.78	有孔球形石製品沈子の再利用
	82	紡錘車	石製品		SC-45	片岩	5.2×5.6×0.9	47.48	
	83	紡錘車	石製品	C-5	包含層・下層		4.0×4.5×1.2	33.51	
	84	不明	鉄製品	H-4	SX-40		6.5		
	85	釣針	鉄製品		包含層		2.7		
	86	不明	鉄製品		SC-45		3.4×3.6		

Tab. 3　遺構一覧表

遺構No.	地点	種別	時期	規模	主な出土遺物
SC-01	E～F-2(上)	竪穴式住居	弥生終末期	4.17×3.07×0.45	弥生土器（甕・支脚・壺・鉢）丹塗土器を含む・瑠璃質安山岩・軽石
SK-02	I-6	土壙	弥生終末期	0.92×0.95×0.35	弥生土器（壺）丹塗土器を含む
SK-03	I-5	土壙	古代	0.9＋α×1.25×0.33	弥生土器（甕）
SK-04	H-6	土壙	弥生終末期	2.05×0.8×0.18	弥生土器（甕・支脚・壺）
SD-05	G～I-4～5	溝	古代	9.0×1.0×0.27	弥生土器（甕・支脚・壺・鉢）丹塗含む
SK-06	D-6	土壙	弥生終末期	1.09×1.04×0.55	弥生土器（甕）軽石
SK-07	C-6	土壙		1.0×0.73×0.09	弥生土器（甕）
SK-08	C-5	土壙	弥生終末期	1.0×0.72×0.65	弥生土器（甕・壺・支脚）
SK-09	G-2～3	土壙	古墳初頭		弥生土器（甕・壺・高坏・支脚）丹塗を含む。古式土器（壺・甕・鉢）
SK-10	C-4	土壙	弥生終末期	1.25＋α×1.08×0.4	弥生土器（甕・壺）
SK-11	B-4	土壙	弥生終末期	0.87×0.9×0.47	弥生土器（甕・壺・器台）
SD-12	A～C-5	溝	古代	9.14×1.42×0.44	弥生土器（甕・壺）丹塗を含む。瓦(平)叩石
SK-13	C-4	土壙	弥生終末期	1.65×1.62×0.27	弥生土器（甕・壺・支脚）
SK-14	C-4	土壙	弥生終末期	1.57×0.86＋α×0.32	弥生土器（器台・甕）
SK-15	B-4	土壙	弥生終末期	1.05×0.48＋α×0.2	弥生土器（甕）軽石
SK-16	C-3	土壙	弥生終末期	2.24×1.50	弥生土器（甕・壺）丹塗を含む
SK-17	A-3	土壙	弥生終末期	2.27×2.17×0.25	弥生土器（甕）
SK-18	A-1～2	土壙	古墳初頭	2.5×1.5×0.46	弥生土器（甕）土師器（甕）、鉄器、軽石
SK-19	B-1	土壙	弥生終末期	1.35×1.25	弥生土器（甕・壺）軽石
SK-20	C～D-3	土壙	弥生終末期	1.28×1.25×0.38	弥生土器（甕・壺・鉢）丹塗を含む
SK-21	E-3	土壙	弥生終末期	3.3×1.95×0.25	弥生土器（甕・壺）丹塗を含む
SK-22	E-6	土壙	弥生終末期	2.6×0.8	弥生土器（甕・鉢・高坏・器台）
SD-23	C-6	溝	弥生中期末～後期	2.5＋α×0.6×0.13	弥生土器（甕・壺・支脚）丹塗を含む
SK-24	B-6	土壙	弥生中期後半～末		弥生土器（甕）丹塗を含む
SD-25	B-5	溝	弥生中期後半～末	4.02×0.67×0.35	弥生土器（甕・壺）丹塗を含む
SD-26	D-5	溝	弥生中期後半～末	1.25×0.35×0.35	弥生土器（甕）
SK-27	C～D-4	土壙	弥生終末期	0.9×0.75×0.37	弥生土器（甕）
SK-28	A-4	土壙	弥生中期後半～末	1.36×0.85×0.65	弥生土器（甕・高坏）丹塗を含む
SK-29	A-3	土壙	弥生中期後半～末	0.9＋α×0.95×0.45	弥生土器（甕）
SK-30	C-1	土壙	弥生中期後半～末	0.95×0.77×0.63	弥生土器（甕）
SK-31	A-1	土壙	弥生中期後半～末	1.56×0.6＋α×0.18	弥生土器（甕）
SK-32	D-2	土壙	弥生中期後半～末	1.8＋α×1.65	弥生土器（甕・壺）丹塗を含む、叩石
SK-33	F-3	土壙		1.57×1.03×0.34	
SK-34	E-3	土壙	近世～近代		高取焼（鉢・ハマ）伊万里赤絵（皿）
SD-35	G-4	溝	弥生中期後半～末	1.1×1.15×0.63	弥生土器（甕・壺）
SK-36	D-5	土壙	弥生中期後半～末	1.28×1.17×0.47	弥生土器（甕・壺）丹塗を含む
SK-37	A-3～4	土壙	弥生中期後半～末	1.25×0.7＋α	弥生土器（甕）
SK-38	A-4	土壙	弥生中期後半～末	1.44×1.09×0.07	弥生土器（器台・壺・甕）丹塗を含む
SX-39	F～G-5～6	土器溜り	弥生中期後半～末	4.05＋α×3.55×0.22	弥生土器（甕・高坏・鉢・器台・支脚・壺・甕棺・叩石・砥石）
SX-40	G～I-3～4	土器溜り	弥生中期後半～末	6.5×0.5×2.1	弥生土器（甕・高坏・鉢・器台・壺・甕棺・無頸壺・支脚）丹塗を含む、ガラス・鉄塊系遺物石器（磨叩石・石錘・軽石・黒曜石）
SK-41	H～I-3	井戸？	弥生終末期	1.35×1.04×0.72	弥生土器（甕・壺・長頸壺）
SK-42	H-4(下)	土壙	弥生中期後半～末	1.82×1.4×0.59	弥生土器（甕・壺）丹塗を含む
SX-43	D-5	集石			
SC-44	G～I-5～6	竪穴式住居	弥生終末期	6.63×4.1×0.5	弥生土器（甕・高坏・鉢・小椀・器台・壺・甕棺・支脚・脚付鉢）石器（磨叩石・有溝石錘・軽石・黒曜石）
SC-45	B～C-4～6	竪穴式住居	弥生中期後半～末	5.6×5.3×0.49	弥生土器（甕・壺・器台・鉢・支脚）丹塗を含む。石器（叩石・軽石・砥石・黒曜石）
SC-46	D～E-3～4	竪穴式住居	弥生終末期	5.6×4.3×0.37	弥生土器（甕・高坏・小椀・坩・壺）石器（叩石・黒曜石・軽石）
SK-47	A～B-2	土壙	弥生終末期	3.0×2.25×0.15	
SK-48	A-1	土壙	弥生終末期	3.2×0.6＋α×0.28	

西新町遺跡 5

福岡市埋蔵文化財調査報告書第484集

1996年（平成8年）3月29日

発行　福岡市教育委員会
印刷　株式会社　川島弘文社

西新町遺跡5

福岡市埋蔵文化財調査報告書484集

1996

福岡市教育委員会